みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Interpretation of Cāturmāsya Sacrifice according to the Ancient Indian Brāhman☒a Literature

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 永ノ尾, 信悟
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004386

ブラーフマナ文献の祭式解釈
——古代インド季節祭 Cāturmāsya を例として——

永ノ尾　信　悟*

The Interpretation of the Cāturmāsya Sacrifice according to the Ancient Indian Brāhmaṇa Literature

Shingo EINOO

The two main sources of information on this ritual of Ancient India are the Śrautasūtras and the Brāhmaṇas. The former provides a detailed description of the sacrifice together with rules for their performance, and the latter hands down the interpretation of the ritual acts.

This paper gives one example of the ritual interpretation of the Brāhmaṇa Literature, namely on the Cāturmāsya Sacrifice. The Cāturmāsya, or Ancient Indian Seasonal Sacrifice, is a ritual complex that consists of three sacrifices held three times a year, at the beginning of spring (Vaiśvadeva), in the rainy season (Varuṇapraghāsa) and in the autumn (Sākamedha).

As a fourth element the Śunāsīrīya is mentioned from the young Brāhmaṇa Literature onward. Interpretation by the Brāhmaṇa literature is in two main dimensions. In the first the Cāturmāsya itself, as a whole or each constituent sacrifice, is explained mainly with help of mythical episodes. In the second each ritual act which makes up the peculiarity of this Cāturmāsya is explained in full detail. The first interpretation coincides almost exactly with the second for the detailed ritual acts. The meanings or the effects ascribed by the Brāhmaṇa interpreter to this ritual complex are the aggregate of the wishes of the Ancient Indian People, who by means of the Vaiśvadeva wished to secure the safe birth of progeny and cattle. The Varuṇapraghāsa appeases the cruel god Varuṇa who reigns over social order and moral conduct, so that he would not punish human beings for their immorality and to ensure that social order would be

* 国立民族学博物館第2研究部

established. By performing the Sākamedha the institutor of the sacrifice desires to repel his rival (*bhrātṛvya*). The ancestral rite (*pitṛyajña*), included in the Sākamedha, is done to satisfy deceased ancestors. The Tryambaka rite is also done to appease the dreadful god Rudra, who causes evil among the people with no reason. The Śunāsīrīya sacrifice was later embedded into this ritual complex to cover the leap year to complete a safe annual cycle.

序　論
1. Cāturmāsya 祭の概要
2. Cāturmāsya 祭の研究史
3. Cāturmāsya 祭の解釈を伝える Brāhmaṇa 文献
本　論
1. Cāturmāsya 祭全体に対する解釈
2. Cāturmāsya 祭を構成する各祭式の名称を列挙しての Cāturmāsya 祭全体の解釈
3. 季節ごとの祭式などに対する個別的解釈
3-1. Vaiśvadeva 祭に関して
3-2. 各祭式に共通する五つの献供に関して
3-3. Varuṇapraghāsa 祭に関して
3-4. Sākamedha 祭に関して
3-5. Mahāhavis に関して
3-6. 祖霊祭に関して
3-7. Tryambaka 祭に関して
3-8. Śunāsīriya 祭に関して
3-9. まとめ
4. 各祭式の個々の祭式規定に対する解釈
4-1. Vaiśvadeva 祭の個々の祭式規定に関して
A. 分　析
B. まとめ
4-2. Varuṇapraghāsa 祭の個々の祭式規定に関して
A. 分　析
B. まとめ
4-3. Sākamedha 祭の個々の祭式規定に関して
A. 分　析
B. まとめ
B-I Sākamedha 祭の Mahāhavis までに関して
B-II 祖霊祭に関して
B-III Tryambaka 祭に関して
4-4. Śunāsīriya 祭の個々の祭式規定に関して
A. 分　析
B. まとめ
結　論
1. 本論第4節のまとめ
2. Heesterman と Thite の解釈について
3. 結　語

序　　論

1. Cāturmāsya 祭の概要

Cāturmāsya 祭は，古代インドの祭式体系によれば，新月・満月祭を基本形とする iṣṭi タイプに属する祭式の一つである[1)]。その Cāturmāsya 祭は，春の初めに行なわ

れる Vaiśvadeva 祭，雨季の初めの Varuṇapraghāsa 祭，秋の初めの Sākamedha 祭，そして多分閏月に行なわれるために，のちに付け加えられたであろう Śunāsīrīya 祭 [OLDENBERG 1970(1923): 442; HEESTERMAN 1957: 27][2] の四つの祭式からなる複合祭式である。一般的に Brāhmaṇa 文献は，Śunāsīrīya 祭を除く三つの祭式からなるものとして Cāturmāsya 祭を考えていて[3]，このことは，「四つ (catur) の月 (māsa) 毎に行なわれる祭式」を意味する Cāturmāsya というこの祭式の名称とも一致する。

Śrauta 祭式を規定する要素として供物と神格がある [HILLEBRANDT 1981 (1897): 97]。それ以外に，この Cāturmāsya 祭の各祭式にはいくつかの特徴的な行為などが含まれている。それらを考慮にいれて，この Cāturmāsya 祭を以下のように記述することができる。

この Cāturmāsya 祭は，四つの異なった時期に行なわれる四つの祭式よりなるが，それらの統一性を保つために，各祭式ごとに常に五つの共通した供物が献じられる。それらの五つとは，(1) Agni 神に対する八皿の puroḍāśa (米または大麦の粉をこねて焼いたもの [永ノ尾 1984b: 526–528])，(2) Soma 神に対する caru (米または大麦の粥 [永ノ尾 1984b: 524–525])，(3) Savitṛ 神に対する十二皿の puroḍāśa，(4) Sarasvatī 神に対する caru，(5) Pūṣan 神に対する caru である。

第一の祭式である Vaiśvadeva 祭においては，上記の五つの供物の他に，(6) Marut 神への七皿の puroḍāśa，(7) Viśve devāḥ への āmikṣā (凝乳)，(8) Dyāvāpṛthivī に対する一皿の puroḍāśa が献じられる。

第二の Varuṇapraghāsa 祭では，五つの共通な供物の他に，(6) Indra-Agni 両神

1) 古代インドの Śrauta 祭式の類型に関して [WEBER 1973 (1870): 322–326; HILLEBRANDT 1981 (1897): 105–166; GONDA 1982: 7–37] を参照。

2) Śunāsīrīya 祭はまた Śunāsīrya 祭ともいわれる。[VISHVA Bandhu 1973: 1448] によると śunāsīrya の形を伝えるのは ŚBM, JB, PB, GB そして MS 4, 3, 3 [42, 4] であり，TB, ŚBK は śunāsīrīya の形を使う。KB についてみると，Lindner 編の KB 6, 15 [28, 7] には śunāsīrīya とあるのに対して，Sarma 編の KB 6, 11, 20 では śunāsīrya の形が採用されている。Śrautasūtra の段階における名称の分布は次のようになる：śunāsīrya (BhārŚS, MānŚS, VārŚS, ŚāṅkhŚS, VaitS); śunāsīrīya (ĀpŚS, HirŚS, KātyŚS, ĀśvŚS); śunāsīrīyahavis (BaudhŚS, VaikhŚS); śunāsīrīyaparus (BaudhDvaidhaS)。

3) Cāturmāsya 祭が Vaiśvadeva 祭，Varuṇapraghāsa 祭，Sākamedha 祭の三つの祭式から構成されているということを前提とした議論をしている Brāhmaṇa 文献の個所としては，以下の本論 2-1 で扱う MS 1, 10, 5 [145, 4-7]; KS 35, 20 [66, 14-67, 2]; TB 1, 6, 8, 1-2; ŚB 5, 2, 4, 1-4, そして本論 2-2. で扱う MS 1, 10, 8 [148, 12-13]; KS 36, 2 [70, 10-12]; TB 1, 5, 6, 3-5; ŚB 2, 6, 4, 1-8, 更には 2-4. で論じる TB 1, 4, 9, 5 がある。また MS 1, 10, 7 [147, 10-11]; KS 36, 2 [69, 14-15] は Cāturmāsya 祭は三つよりなる (tredhāvihita-) といい，TB 1, 6, 2, 2; ŚB 2, 6, 3, 1 (本論 1-2. を参照) は「一年を三つに分けて」Cāturmāsya 祭を行なうという。更に Śunāsīrīya 祭を排除して，Cāturmāsya 祭の三つの構成要素を列挙して議論を行なう個所として次のものもある：KS 23, 7 [83, 2-4]; MS 3, 6, 10 [74, 10-12]; TB 3, 2, 2, 3。

への十一皿又は十二皿の puroḍāśa, (7) Marut 神への āmikṣā, (8) Varuṇa 神への āmikṣā, (9) Ka 神への一皿の puroḍāśa が加わる。

この祭式には更にいくつかの特記すべき点がある。通常の iṣṭi において供物や祭具をおく祭場の一部である vedi は東の祭火 āhavanīya の西側に一つ作られるだけであるが, Varuṇapraghāsa 祭においては, āhavanīya の東側に平行して, 北と南に二つの vedi と āhavanīya が作られる。Adhvaryu 祭官は北の vedi を中心にさまざまな儀式を執り行ない, 南の vedi では Pratiprasthātṛ 祭官が, Marut 神への āmikṣā にかかわるさまざまな行為を行なう。両祭官は大麦の粉をこねて牡羊と牝羊の像をつくり, それぞれの性的特徴を備え, Varuṇa 神と Marut 神に捧げられている āmikṣā とともに献じる。又, 同じく大麦のねり粉で小さな食器の形のダンゴ (karambhapātra) が, 女を含めた祭主の家の構成員の数より一つ多く作られ, それらを祭主と彼の妻が箕にのせて祭火に献じる。その献供の前に, Pratiprasthātṛ 祭官が祭主の妻に間男のあるなしの告白を強要する。祭式が終了して後, 普通は Soma 祭の終了時に行なわれる沐浴 (avabhṛtha) が行なわれるなどである。

第三の Sākamedha 祭は, それ自身が複合祭式の性格を帯びている。中心になる式日が二日にわたり, 第一日の早朝, 日の出と共に Agni anīkavat に八皿の puroḍāśa の iṣṭi が行なわれ, 正午に Marut sāṃtapana へ caru が献じられ, 夕方に Marut gṛhamedhin に, 祭主が所有するすべての牝牛から搾った乳で煮た caru の献供が行なわれる。祭式の期間は通常禁欲的生活規則が課せられるが, その夜は祭主の家族はアイシャドーや塗油で身を飾り, 豊富に米粥を炊き, 牛を屠り, 盛大な宴をはる。また仔牛達も母牛とともに一夜を過ごすことが許される。一夜明けた式日第二日目, 日の出とともに, Marut krīḍin に七皿の puroḍāśa が献じられ, その後, Mahāhavis と呼ばれる Sākamedha 祭の中心祭が行なわれる。この Mahāhavis は, Cāturmāsya 祭に共通する五つの供物の他に, (6) Indra-Agni 神への十一皿の puroḍāśa, (7) Indra 神への caru, (8) Viśvakarman 神への一皿の puroḍāśa が更に加えられる。この Mahāhavis は iṣṭi の基本形に従って執り行なわれ, 終了後, Indra-Agni 両神への puroḍāśa の調理の際に出た籾殻を Varuṇa 神のために水中に献じ, その同じ水で avabhṛtha 沐浴が行なわれる。

その午後, Pitṛyajña/Mahāpitṛyajña という祖霊祭が行なわれる。南の祭火 dakṣiṇāgni の南又は南東の方角に, 中心線が北西から南東に走る正方形の vedi がつくられ, 囲われ, その中央に dakṣiṇāgni より燠をはこんで火炉がつくられる。Soma pitṛmat に六皿の puroḍāśa, Pitṛ barhiṣad に dhānā, そして Pitṛ agniṣvātta に

mantha が献じられる。この祖霊祭には祭主の妻は列席しない。この三種の献供の後に，Piṇḍapitṛyajña と同じような儀式が行なわれる。

この祖霊祭が Adhvaryu 祭官により執り行なわれている間に，Pratiprasthātṛ 祭官は，Rudra を祭神とする Tryambaka 祭への供物の準備をする。それは一皿の puroḍāśa で，Varuṇapraghāsa 祭の時に祭主と彼の妻によって献じられた karambha-pātra と同様に，祭主の家族数より一つだけ多く作られる。その供物が準備され，祖霊祭も終わると，dakṣiṇāgni より一本の燠を取り出し，供物，祭具をもって北東の方角に向かい，道中，モグラ塚に一皿の puroḍāśa を献じ，更に進み，四辻の中央に火炉を作り，parṇa/palāśa の真中の葉を祭匙として献供を行なう。その後，祭主の家族はその火の周りを時計回りに三回，そして逆回りに三回まわり，結婚適令期の娘がいると，彼女を祝福する。供物の残りを籠に入れ，木にかけ，後ろを見ずに参加者はもとの祭場に帰ってくる。このように第三番目の Sākamedha 祭はさまざまな要素を含んだ複合祭である。

最後の Śunāsīrya 祭の供物は，Cāturmāsya 祭に共通な五つの供物の他に，(6) Indra-Agni への十二皿の puroḍāśa, (7) Viśve devāḥ への caru, (8) Indra śunāsīra への十二皿の puroḍāśa, (9) Vāyu への牛乳，(10) Sūrya への一皿の puroḍāśa である。この祭式も一般的な iṣṭi の基本形に従って行なわれる。祭官への謝礼のうちでめだつものとして，六頭又は十二頭の牛につながれた犁がある [永ノ尾 1984a: 64–67]。

2. Cāturmāsya 祭の研究史

Cāturmāsya 祭を単独に扱った文献として Bhide [1979] がある。黒 Yajurveda の Taittirīya 派に属する Hiraṇyakeśī-Śrautasūtra の中の Cāturmāsya 祭を記述する第五章の新たなテキスト提示が Bhide の著作の中心的なテーマである。しかし，彼はその文献の第二章と第三章でそれぞれ Brāhmaṇa 文献および Śrautasūtra 文献における Cāturmāsya 祭の記述を扱い，第六章で独立して Śunāsīrīya 祭を祖述している。この Cāturmāsya 祭は，iṣṭi の一タイプとして独立して年に三回行なわれる以外に，Rājasūya 祭に組み込まれたり，Soma 祭のパターンに従って行なわれたりと，いろいろな挙行方法があるが，それらを一括して第五章で論じ，また第四章では，Śrautasūtra 文献と Prayoga 文献の関係をも詳しく扱った点で，彼は Cāturmāsya 祭研究に大きな貢献をしている。

これ以外に Śrauta 祭式の一つとしての Cāturmāsya 祭を簡単に紹介したものと

して以下の文献がある。[GONDA 1978: 146–147], [HEESTERMAN 1957: 27–29, 33–34], [HILLEBRANDT 1981 (1897): 115–119], [KANE 1974: 1089–1106], [KEITH 1970 (1925): 321–323], [OLDENBERG 1970 (1923): 439–442], [THITE 1975: 55–76], [WEBER 1973 (1870): 337–343]。

これらの研究のうち，Cāturmāsya 祭に対する，Brāhmaṇa 文献の解釈にもとずいた意味づけ，機能について論じたものは，Heesterman [1957] と Thite [1975] の二つである。その両者の Cāturmāsya 祭の解釈については，結論において論じるつもりである。

3. Cāturmāsya 祭の解釈を伝える Brāhmaṇa 文献

Cāturmāsya 祭に対して解釈を与えている Brāhmaṇa 文献は以下のごとくである。

MS 1, 10, 5–20 [145, 1–161, 6]。
KS 35, 20–36, 14 [66, 11–81, 21]。
TB 1, 4, 9, 2–10; 1, 6, 2, 1–7, 1, 2。
ŚB 2, 5, 1, 1–6, 4, 9。
KB 5, 1–8 (5, 5, 1–10, 25)。
GB 2, 1, 19–26。

更に，JB 2, 228–234 は Soma 祭のパターンに従って行なわれる Cāturmāsya 祭の解釈を与えている。なお本論文で扱う古代インド祭式文献は略号によって示している。それらについては論文末の略字解を参照されたい。

Brāhmaṇa 文献はいろいろなかたちで Cāturmāsya 祭の解釈を与えている。それらの解釈を分析することによって，Brāhmaṇa 文献が Cāturmāsya 祭に与えている意味，機能を考察するわけであるが，その際，次のような方法をとる。(1) Cāturmāsya 祭全体に対してどのような機能を認めているか。(2) Cāturmāsya 祭を構成する，各季節毎の祭式の名称を一括して挙げて，Cāturmāsya 祭全体をどのように考えているか。(3) それら季節毎の祭式や，Cāturmāsya 祭に共通する五つの供物，Sākamedha 祭に属する中心祭 Mahāhavis, 祖霊祭，Rudra 神に対する Tryambaka 祭などのまとまったトピックをどのように意味づけているか。(4) Cāturmāsya 祭は上述のごとく iṣṭi のタイプに属する祭式であるが，Brāhmaṇa 文献はこの祭式を解釈するにあたり，iṣṭi の基本形からはずれるこまかな執行規定を挙げ，それらに対して逐一解釈を与えていく方法をとっている。この種の解釈が Brāhmaṇa 文献の祭式解釈の大部分をしめているが，これら多くの個々の祭式行為に対する解釈からどのような

祭式像が生じてくるか。以上四つの観点から考察してみる。

本　　論

1.　Cāturmāsya 祭全体に対する解釈

1-1.　Maitrāyaṇī Saṁhitā はその解釈の冒頭で (MS 1, 10, 5 [145, 1–4]) 次のように述べる。

> 神々と Asura 達はこの世界にいた。かの Prajāpati は望んだ，「Asura 達を駆逐しよう。生類を創ろう」と。彼は Cāturmāsya 祭を見た。Cāturmāsya 祭によって Asura 達を駆逐した。Cāturmāsya 祭によって生類を創った。このように知って Cāturmāsya 祭をおこなう者は，敵対者を駆逐する。子孫と家畜がつぎつぎと生まれる。

これと同様の解釈を KS 35, 20 [66, 11–14] は伝えている。この解釈によると，Cāturmāsya 祭により，神々は彼等の敵 Asura 達を駆逐し，生類を創造し，この世にあって祭主は彼の敵対者を滅ぼし，子孫と家畜の繁栄を獲得する。

これに類似の解釈を TB 1, 4, 9, 3–5 は与える。

> ……彼等（神々）は Cāturmāsya 祭を見た。それを献じた。それによって彼等（Asura 達）の滋養 (ūrj) をとった。それで神々は栄えた。Asura 達は滅びた。Cāturmāsya 祭を行なうと，Asura 達が手にいれた滋養をそれで手にいれる。自分は栄え，彼の敵対者は滅びる。Cāturmāsya 祭は virāj のいさおし (vikrānti)。

1-2.　Śatapatha Brāhmaṇa は Cāturmāsya 祭の章の終わりに近い2. 6. 3. 1で「Cāturmāsya 祭を行う者の善行は不滅」と主張し，以下のような二つの理由づけを行なう。

> 「何故なら彼は年を勝ち取るから。それ故彼の（善行）は不滅となる。それ（年）を三つに分けて祭る[4]。三つに分けて勝ち取る。年は一切。一切は不滅。これによって彼の善行は不滅となる」
> 「季節となって彼は神々のもとへ行く。そして不滅は神々のもの。これによって彼の善行は不滅となる」

Cāturmāsya 祭は一年を三つに分ける，春と雨季と秋の三つの季節に行なわれるので，この祭式の解釈において，年や季節は重要な役割を演じる。その季節との関連で ŚB 2, 6, 4, 9（これは ŚB の Cāturmāsya 祭の一番最後の解釈）は更に次のような解釈を与える。

---

4) つまり Vaiśvadeva 祭，Varuṇapraghāsa 祭，Sākamedha 祭の三つに分けてである。

ある季節にあの世に行った者を，その季節は次の季節にわたす。次の季節は次の季節にわたす。Cāturmāsya 祭を行なう者は最高の場所 (sthāna) に赴く。最高の状態 (gati) に赴く。

TB 1, 4, 10, 10 にも，Cāturmāsya 祭を行なうものは，vasanta, grīṣma, varṣā, śarad, hemanta それぞれの季節に死ぬと，それぞれの季節となり，年となり，年と同じである Prajāpati となると説かれている。

1-3. KB 5, 1 [18, 10–11] (5, 1, 10, 11) および GB 2, 1, 19 によると，Cāturmāsya 祭は治療祭式 (bhaiṣajyayajña) であるとされる。

2. Cāturmāsya 祭を構成する各祭式の名称を列挙しての Cāturmāsya 祭全体の解釈

2-1. MS 1, 10, 5 [145, 4–7] および KS 35, 20 [66, 14–67, 2] は次のような簡単な解釈を伝える。

Agniṣṭoma 祭から Vaiśvadeva 祭を作り，Prajāpati は生類を創った。Ukthya 祭から Varuṇapraghāsa 祭を作り，Varuṇa に生類を択えさせた。Atirātra 祭から Sākamedha 祭を作り，Indra は Vṛtra を殺した。

独立した Cāturmāsya 祭でなく，Rājasūya 祭にくみこまれている Cāturmāsya 祭を扱いつつ，ŚB 5, 2, 4, 1–4 はこれに似た解釈を示す。

……Vaiśvadeva 祭で Prajāpati は繁栄を，生類を創った。……Varuṇapraghāsa 祭で Prajāpati は生類を Vruaṇa の枷より解き放った。彼の生類は病なく，罪 (kilbiṣa) なくつぎつぎに生まれた。……Sākamedha 祭で神々は Vṛtra を殺した。彼等のこの勝利をそれで勝ち取った。そのようにしてこの者はこれにより悪しき憎むべき敵対者を殺す。そのようにして勝利する。……

TB 1, 6, 8, 1–2 はこれら三つの祭式に加えて Sākamedha 中の Tryambaka 祭と Pitṛyajña をも考慮にいれ，次のような解釈を与える。

Vaiśvadeva 祭で Prajāpati は生類を創った。彼等を，Varuṇapraghāsa 祭で Varuṇa の枷より解き放った。Sākamedha 祭で安定させた。Tryambaka 祭で Rudra に分け前を与えて宥めた。Pitṛyajña で天界に行かせた。

このあと，同様のことを祭主について主張している。

Vaiśvadeva 祭に関して，これら四つの Brāhmaṇa 文献は一致して，その祭式による生類の創造を説く。更に Varuṇapraghāsa 祭によって生類を Varuṇa に捉えさせたり (MS, KS)，その反対に Varuṇa の枷より解放し (ŚB, TB)，Sākamedha 祭

により Vṛtra を殺したり (MS, KS, ŚB), 祭主を安定させる (TB) としている。

2-2. Cāturmāsya 祭は 4 カ月毎に行なわれるが，それら 4 カ月毎のそれぞれの祭式によって，4 カ月を獲得したり，敵対者から奪ったりするということを，MS 1, 10, 8 [148, 12–13], KS 36, 2 [70, 10–12], TB 1, 5, 6, 3–5, ŚB 2, 6, 4, 1–8 は異口同音に説いている。

2-3. 年は普通 saṃvatsara といわれるが，そのほかに parivatsara, idāvatsara, anuvatsara と呼ばれる年もあり[5]，Śunāsīrīya 祭を含めた四つの祭式でそれぞれそれら四種の年を獲得するということを TB 1, 4, 10, 1–3 は説いている。また，年の獲得に関連して GB 2, 1, 26 は次のような解釈を伝えている。

> それら Cāturmāsya 祭で神々はすべての願望 (kāma) を得た。すべての iṣṭi を，すべての不死性を。Cāturmāsya 祭は Prajāpati, 24 からなる年。Vaiśvadeva 祭は彼の顔。Varuṇapraghāsa 祭は両の腕。これら三つの (Sākamedha 祭前日の) iṣṭi は prāṇa, apāna, vyāna。Mahāhavis 祭は身体 (ātman)。Śunāsīrīya 祭は安定。Cāturmāsya 祭は Prajāpati, この年。Prajāpati はすべて。Cāturmāsya 祭はすべて。このように知る者は，又，このように知って Cāturmāsya 祭を行なう者は，すなわちすべてであり，すべてを得る。

2-4. TB 1, 4, 9, 5 によると，Vaiśvadeva 祭によりこの地上世界において安定し，Varuṇapraghāsa 祭により虚空において，そして Sākamedha 祭によって天界において安定し，その結果，「このように知って Cāturmāsya 祭を行なう者は欠けることなく (sarvam) 栄える (bhavati)」といわれる。

3. 季節ごとの祭式などに対する個別的解釈

3-1. Vaiśvadeva 祭に関して

3-1-1. Vaiśvadeva 祭に関しては，多くのテキストが，それによって Prajāpati が生類を創造したと伝えている。それを伝えるテキストは以下のごとくである。MS 1, 10, 6 [146, 9], MS 1, 10, 10 [150, 7]=KS 36, 5 [72, 3], KS 35, 20 [67, 2–3], ŚB 2, 5, 2, 1, KB 5, 3 [19, 5]=GB 2, 1, 21. また，MS 1, 10, 8 [148, 22–149, 1] =KS 36, 3 [70, 14–15] によると，Cāturmāsya 祭は繁殖の手段 (prajanana) であり，ŚB 2, 5, 1, 22 によると，Prajāpati はこの祭式を行ない，prajāti および śrī を

5) しかし普通このようないろいろな名称の年が列挙されるとき，五つの名称が挙げられる。例えば saṃvatsara, parivatsara, idāvatsara, anuvatsara, udvatsara (KS 13, 15 [198, 3]; 39, 6 [123, 22-124, 1]; 40, 6 [140, 4]), または saṃvatsara, parivatsara, idāvatsara, idvatsara, vatsara (VS 27, 45; TS 5, 5, 7, 1-3; ŚB 8, 1, 4, 8) または saṃvatsara, parivatsara, idāvatsara, udvatsara, vatsara (MS 4, 9, 18 [135, 7-8]), 更には saṃvatsara, parivatsara, idāvatsara, iduvatsara, idvatsara, vatsara (TB 3, 10, 4, 1; TA 4, 19, 1)。

実現したとされる。

神話の世界における Prajāpati による生類の創造は，現実世界においては，祭主が子孫や家畜に繁栄するという事実に対応する。そのうち家畜の繁栄に対する願望と結び付けられ MS 1, 10, 8 [148, 20–22] は更に次のような解釈を伝える。

> 家畜を望む者は Vaiśvadeva 祭を行なうべし。Varuṇapraghāsa 祭，Sākamedha 祭は行なわない。千（頭の牛）を持つ欠けることのない人間として生まれる。しかも更に彼の力の及ぶ限りの状態に達する。

これに対応する解釈を KS 36, 3 [70, 13–14] も伝えている。この千頭の牛の獲得のモティーフが，それ以外の要素と結び付けられた解釈を TB 1, 4, 10, 3–5 は以下のように伝える。

> 一切の神々は一緒に祭式を行なった。彼等は Agni に対して祭式を行なった。Agni のいる世界を勝ち取った。Vaiśvadeva 祭を行なうと，Agni のいるこの世界を勝ち取る。Agni と一緒の状態に赴く。もし Vaiśvadeva 祭を行なうと，すると年の家長 (gṛhapati) を得る。もし年の家長を得ると，すると千（頭の牛を報酬とする祭式）を祭る者 (sahasrayājin) を得る。もし千を祭る者を得ると，家庭祭を行なう者 (gṛhamedhin) を得る。もし家庭祭を行なう者を得ると，Agni となる。もし Agni となると，牝牛となる。これが Vaiśvadeva 祭の大きさ。これはこれらの最小。これより以上の栄えが生じる。

3-1-2. KB 5, 1 [18, 9–10] (5, 1, 8–9) によると Phālguna 月の満月の日に Vaiśvadeva 祭を行なうのは，年の始めにその年を満足させることであるとされる。

このようにみてみると，Vaiśvadeva 祭によって祭主は子孫と家畜の繁栄を得るということを，Brāhmaṇa 文献はほぼ一致して主張していると言ってよいであろう。

3-2. 各祭式に共通する五つの献供に関して

Cāturmāsya 祭を構成する各祭式において常に行なわれる五つの献供[6] に関して大きく分けて二種の解釈が与えられている。第一のグループは生類の創造に関するものであり，第二は Vṛtra 殺しの神話をめぐるものである。

3-2-1. MS 1, 10, 5 [145, 7–10] は先ず次のような解釈を伝える。

> ある生類は創られていた。あるものは創られていなかった。そこで Prajāpati は望んだ，「生類を創ろう」と。祭式は年。Prajāpati は祭式。彼はこの一対の乳を自分の中に置いた。乳房の乳と bāhya(?) を。そこでこれらの諸神格にこれらの供物を分け前として取り出した。それらによって生類を創った。

KS 35, 20 [67, 3–6] も同様の解釈を伝える。

6) 各祭式に共通する五つの献供に関しては p. 1003 を見よ。

ŚB 2, 5, 1, 1–7 は Prajāpati による生類の創造に関してかなり長い神話をつたえている。それによると，Prajāpati は最初三回にわたって生類の創造を行なったが，そのつど創造された生類はまともに育たずに，鳥になったり，蛇になったりした。食物がないことがその原因であると知った Prajāpati は，自分の乳房に乳を満たし，その後再び生類を創造すると，食物を得た生類は滅びることなく育ったとされる[7]。

これら二つの神話と五つの供物との関連は明確ではないが，それぞれの文献の五つの供物の解釈の冒頭にあるため，一応ここで紹介する。

3-2-2. 生類の創造に関する第二の解釈は MS 1, 10, 5 [145, 11–12], KS 35, 20 [67, 6–8] の伝えるように，ごく簡単なものである。

> 季節からそれら生類は生まれた。これら五つの供物は季節。何故なら季節は五つだから。そこから生まれる。

3-2-3. 生類の創造に関する第三の解釈は，五つの供物の各祭神が生類の創造にどのように具体的に係わるかに関してである。先ず MS 1, 10, 5 [145, 12–19] は次のような解釈を与える。

> Agni は（精液を）放出した。Soma は精液を（母体内に）置いた。Agni と Soma は一対。Savitṛ は出産 (prajanana) へと促した。Savitṛ は一年。一年は十二カ月。それゆえ十二皿。更に又，十二皿は一切神にかなうため。小声で献供する。何故なら一年は名状し難きもの。Sarasvatī は創られた(生類)に言葉を置いた。Pūṣan を安定の基礎として創られた。Sarasvatī は言葉。Pūṣan は家畜。言葉と家畜は一対。中央のところで(？)Prajāpati により創られた。終りのところで（？）一対よりさまざまな方向へと生み出された。そこで，今，中央のところで Prajāpati により創られる。そこで，むこうで，終りのところで（？）一対よりさまざまな方向へと生み出される。

対応する解釈は KS 35, 20 [67, 8–15] にも伝えられている。

TB 1, 6, 2, 1–2 はこれら五柱の神格を繁栄の主 (puṣṭipati) と呼び，次のような解釈を伝える。

> Vaiśvadeva 祭で Prajāpati は生類を創った。創られた彼等は繁殖しなかった。かの Agni は望んだ，「私がこれらを繁殖させよう」と。彼は Prajāpati に苦痛 (śuc) を置いた。彼 (Prajāpati) は生類を望みつつ苦しんだ。それ故生類を享受する場合でも，しない場合でも，いずれの場合でも生類を望む者は苦しむ。彼等（生類）に Agni を元に戻した。彼等を Agni

7) これに対応する神話は JB 2, 228-230 にも伝えられている。そして ŚB, JB ともに RV 8, 90, 14 (8, 101 14) の解釈の形をとっている。それら二つの神話のもとになる RV の詩は以下のようなもの：prajá ha tisró atyáyam īyur ny ànyá arkám abhíto viviśre/ bṛhád dha tasthau bhúvaneṣv antáh pávamāno haríta á viveśa// 「三つの生類は過ぎ去ってしまった。他のものは賛歌の回りに座っている。彼は高く世界の中に立っている。清められつつ彼は黄金色のものたちの中にはいっていった」。

は求めた。Soma は精液を置いた。Savitṛ は生まれさせた。Sarasvatī は言葉を置いた。Pūṣan は栄えさせた。これら繁栄の主たる神々は一年に三回用いられる。Prajāpati は一年。すなわち一年によって彼のために生類を生み出したのである。

ŚB 2, 5, 1, 8–11 の伝える解釈は次のようである。

……諸神格の顔は Agni。彼 (Agni) は生む者としての Prajāpati。……Soma は精液。生む者としての Agni に Soma を精液として注ぐ。それが第一の生産的一対。……Savitṛ は諸神格の中で鼓舞する者としての Prajāpati。まん中の生む者。……Sarasvatī は女。Pūṣan は男。それは再び生産的一対。この二種の生産的一対から Prajāpati は生類を創った。

これら四つの Brāhmaṇa 文献においてそれぞれの神格に付与されている機能は同じではないが，これら五柱の神々がなんらかのかたちで誕生の過程に参加しているということは，等しく主張されている。従ってこれら五柱の神々への献供は，Prajāpati にとっては生類の創造の機能を持ち，祭主にとっては子孫や家畜の誕生を助けるという役割を演じる。

3-2-4. Cāturmāsya 祭に共通する五つの献供に想定される第二の機能は「Vṛtra 殺し」である。この点に関しては MS 1, 10, 5 [145, 19–146, 2] に次のような神話的主張が伝えられている。

これらの供物は Vṛtra 殺し。Agni を前衛 (anīka) として Indra は Vṛtra を殺した。Soma を王として，Savitṛ に鼓舞され，Sarasvatī を物見 (cetṛ) として。Pūṣan は勇気をもって彼を助けた。

これに対応する解釈を KS 35, 20 [67, 15–68, 2][8] も伝えている。

ŚB 2, 5, 4, 3–7 は Sākamedha 祭の解釈の冒頭で，これら五柱の神々が Vṛtra 殺しにどのように係わっているかを教える。

Agni を光輝 (tejas) として彼ら（神々）はそれ (Vṛtra) を殺した。かの光輝たる Agni は動揺しなかった。……Soma を王として彼らはそれを殺した。彼らは Soma を王とする。……Savitṛ は神々の中の鼓舞者。Savitṛ に鼓舞され彼らはそれを殺した。……Sarasvatī は言葉。言葉が実に声援を送った，「打て，殺せ」と。……Pūṣan はこの大地。これ（大地）はそれを殺されるように差し出した。それ（大地）によって差し出されたそれ (Vṛtra) を彼らは殺した。

MS, KS によると，RV 以来の神話と同様，Vṛtra を殺すのは Indra で，これら五柱の神々が Indra の Vṛtra 殺しの援助をするということになっているが，ŚB によ

8) KS 35, 20 [68, 1-2] では sarasvatyā caitryām となっている。つまり「Sarasvatī とともに Caitra 月の満月の日に」と解釈される。なお Vaiśvadeva 祭は Śrautasūtra の規定によれば Phālguna 月，または Caitra 月の満月の日に行なわれるとされる。

ると，Vṛtra を殺す主体としての Indra は姿を消し，この Vṛtra 殺しという神話的偉業は神々の共同作業となる。

TB 1, 6, 2, 5–7 はこの五つの献供の解釈に，Vṛtra 殺しのモティーフを用いず，神々と Asura 達の争いという場面を設定して，この五つの献供の解釈を行なう。

> 神々と Asura 達は争っていた。かの Agni は言った，「私を始めに祭れ。私を顔としてあなた達は Asura 達に勝つだろう」と。「私を二番目に」と Soma は言った，「私を王としてあなた達は勝つだろう」と。「私を三番目に」と Savitṛ は言った，「私に鼓舞されあなた達は勝つだろう」と。「私を四番目に」と Sarasvatī は言った，「Indra の力をあなた達に私は置くだろう」と。「私を五番目に」と Pūṣan は言った，「私を安定の基盤としてあなた達は勝つだろう」と。彼ら（神々）は Agni を顔として Asura 達に勝った，Soma を王として，Savitṛ により鼓舞され，Sarasvatī は Indra の力を置いた。Pūṣan は安定の基盤であった。そこで神々は完全に勝利した。これらの供物が献じられるのは，完全な勝利のためである。

Indra による Vṛtra 殺し，神々による Vṛtra 殺し，神々と Asura 達の争いと，神々の世界の話としては各々多少異なった話素を示すが，これらの話素は祭主の世界に移されると，祭主が敵対者を滅ぼすということとなり，これら，四 Brāhmaṇa 文献は結果として同じ機能を五つの献供に付与していることになる。

Cāturmāsya 祭に共通する五つの献供に想定された機能としての生類の創造と Vṛtra 殺しは，全く別なものとして素直に解釈すべきであろう。生類の創造という機能は Vaiśvadeva 祭の解釈にうまく対応する。Vṛtra 殺し，あるいは Asura に対する勝利という解釈を MS も KS も TB も，Cāturmāsya 祭の解釈の冒頭で，生類の創造の解釈に続けて行なっているため奇異な印象を与える。他方，ŚB がこの第二の解釈を Sākamedha 祭の章の冒頭のところで与え，しかも，その Sākamedha 祭自体に Vṛtra 殺しという機能が付与されていることを考えると，MS, KS, TB は，Sākamedha 祭の解釈の際に想定される，Vṛtra 殺しなどの五つの共通献供の機能を，Cāturmāsya 祭の解釈の冒頭に，先取りして与えていると見なしてよいであろう。

3-2-5. KB 5, 2 [18, 17–21] (5, 2, 1–12) およびそれに対応する GB 2, 1, 20 [157, 4–9] はこの五つの献供によって五柱の神々を満足させるという解釈を行なう。

3-3. Varuṇapraghāsa 祭に関して

Varuṇapraghāsa 祭の効果として Brāhmaṇa 文献は，主として二つのことを挙げている。一つは，MS, KS のいう祭式による困窮 (aṁhas) の除去 (aveṣṭi) であり，いま一つは，TB, ŚB, KB, GB のいう Varuṇa の枷 (varuṇapāśa) からの解放である[9]。

9) [Vishva Bandhu 1962: 2761] によると，MS, KS はともに他の章においては Varuṇa の枷 (varuṇapāśa) からの解放という解釈を行なっているが，両文献ともこの Cāturmāsya 祭を扱う章においては，Brāhmaṇa 文献を通じて広く知られているこのテーマを用いていない。

3-3-1. aṁhas の aveṣṭi という解釈を MS 1, 10, 10 [150, 7–11] は次のように伝える。

> Vaiśvadeva 祭によって Prajāpati は生類を創った。Marut 神達は彼の供物を奪った。それで困窮にとりつかれて彼ら（生類）は創られた。彼ら（生類）のために癒す手段 (bheṣaja) を彼 (Prajāpati) は求めた。彼はこの乳を自分の中から作りだした。それで彼らから困窮を除いた。Varuṇapraghāsa 祭は困窮を祭によって除くもの。Varuṇapraghāsa 祭を行うのは，すべての困窮を祭によって除くためである。

KS のこれに対応する個所は 36, 5 [72, 3–6] である。この aṁhas の aveṣṭi という解釈は更に MS 1, 10, 8 [149, 1–2]＝KS 36, 3 [70, 15–17] や MS 1, 10, 14 [153, 18]＝KS 36, 8 [75, 12] においても言及されている。

3-3-2. TB 1, 6, 4, 1–2 によると Varuṇa の枷からの解放という解釈は次のようである。

> Prajāpati は Savitṛ となって生類を創った。それら（生類）は彼 (Prajāpati) を侮った。それらは彼から出ていった。その生類を (Prajāpati は) Varuṇa となり，Varuṇa に襲わせた。それら生類は Varuṇa に捕えられ，Prajāpati のもとに再び助けを求めて行った，守護を求めて。かの Prajāpati は Varuṇapraghāsa 祭を見た。それを行なった。それによって，彼は生類を Varuṇa の枷より解いた。Varuṇapraghāsa 祭が行なわれるのは，生類が Varuṇa に捕えられないため。

ŚB 2, 5, 2, 2–3 によると Varuṇa に捕えられた生類達は，ただ息をするだけで，ぐったりとしてしまった。そこで Prajāpati はこの Varuṇapraghāsa 祭で癒し，「そこで彼の既に生まれている生類，そしてまだ生まれていない生類，その二種（の生類）を Varuṇa の枷から解きはなった。彼のそれら生類は病もなく災もなく繁栄した」とされる。

また KB 5, 3 [19, 5–10] (5, 3, 1–9) および GB 2, 1, 21 [158, 1–8] によると，生類達は Varuṇa の許可なく Varuṇa の大麦を食べたため，Varuṇa の枷に縛られた。助けを求められた Prajāpati はこの Varuṇapraghāsa 祭を行ない，「Varuṇa を満足させた。満足したかの Varuṇa は Varuṇa の枷から，すべての罪から生類を解きはなった」とされる。

困窮 (aṁhas) が，Varuṇa が生類にもたらす災であるとすると[10]，その aṁhas を祭ることによって取り除くことは，生類に対する Varuṇa の悪い影響を排除することであり，Varuṇa の枷 (varuṇapāśa) からの解放と軌を一にし，この二種の解釈

10) aṁhas に関しては [Gonda 1957] を参照。

は同じものと考えられる。そして，Varuṇa が aṁhas を生類にもたらすのも，枷によって生類を捕えるのも，生類が犯した罪 (enas) の故であるとすると，aṁhas の除去および varuṇapāśa からの解放の結果は罪 (enas) のない状態となろう。そのことを MS 1, 10, 10 [150, 12–13]＝KS 36, 5 [72, 7–8] は「Varuṇapraghāsa 祭を行なう者において罪は，生まれたばかりの子供にある程の罪になる」と表現する。

3-3-3. TB 1, 4, 10, 6 の伝える Varuṇapraghāsa 祭を行なうと Āditya 神（太陽）のいる世界を勝ち取り，Āditya 神と一緒にいる状態に赴くという解釈はかなり思弁的傾向の強い解釈であろう。

3-4. Sākamedha 祭に関して

3-4-1. Sākamedha 祭の効果として先ず挙げるべきは Vṛtra 殺しということである。そのことを KS 36, 8 [75, 16] は端的に「Sākamedha 祭は Vṛtra 殺しである」と表現し，ŚB 2, 5, 3, 1 は次のように言う。

> そこでこの Sākamedha 祭を（行なう）。これによって神々は Vṛtra を殺した。これによって彼らのこの完全な勝利 (vijiti) を獲得した。そのようにこの者（祭主）はこれによって悪しき，憎むべき敵対者を殺す。そのように完全に勝利する。

ŚB によると Sākamedha 祭によって Vṛtra を殺すことは完全な勝利 (vijiti) を獲得することとされるが，そのことを強調して ŚB 2, 5, 4, 10 は更に次のように述べる。

> Sākamedha 祭を行ない，完全に勝利した神々にとって一切の行為が成就した。すべてが勝ち取られた。Sākamedha 祭を行ない，完全に勝利したこの者（祭主）にとって一切の行為が成就する。すべてが勝ち取られる。

3-4-2. KB 5, 5 [20, 3–4] (5, 6, 1–3)＝GB 2, 1, 23 [159, 13–15] は Sākamedha 祭を Indra 神と関係づけ，次のような解釈を伝える。

> Sākamedha 祭は Indra に対する祭式。大王は先ず初めに軍の前衛を派遣して，その後で恐れのなくなった道を行くように，まず初めにこれらの諸神格を祭るのである。

3-4-3. KB 5, 5 [20, 5] (5, 6, 4–5)＝GB 2, 1, 23 [159, 15–16] は更にこの祭式を Mahāvrata 祭と等置する。

3-4-4. TB 1, 4, 10, 6–8 はこの章に特有な思弁的傾向の強い解釈の続きとして，Sākamedha 祭を行なう者は月の輝いている世界を勝ち取り，その月と一緒にいる状態に赴くという解釈を挙げる。

3-5. Mahāhavis に関して

Sākamedha 祭の二日目に行なわれる，この祭式の中心祭である Mahāhavis に対し

て別個に解釈を与えているのは ŚB のみである。そして ŚB はこの Mahāhavis に Vṛtra 殺しおよび，繁殖 (prajāti) と栄光 (śrī) の獲得という二種の解釈を行なう。

3-5-1. Vṛtra 殺しとしての解釈は Sākamedha 祭とほとんど同じで ŚB 2, 5, 4, 1 によると次のようになる。

> Mahāhavis によって神々は Vṛtra を殺した。それによって彼らの完全な勝利を獲得した。そのようにこの者（祭主）はこれによって悪しき，憎むべき敵対者を殺す。そのようにして完全に勝利する。

Vṛtra を殺し，完全な勝利を獲得したというこの解釈の前半は，更に ŚB 2, 6, 1, 1 および 2, 6, 2, 1 にも繰返し登場している。

3-5-2. 第二の解釈に関して ŚB 2, 5, 4, 11 は次のように記す。

> この祭式を行なって神々は，この神々の繁殖 (prajāti)，栄光 (śrī) となった。このように知ってこの祭式を行なう者はこの繁殖で繁殖する。この栄光に達する。

3-6. 祖霊祭に関して

Sākamedha 祭の二日目の午後に行なわれる祖霊祭 (Pitṛyajña) に対する解釈は MS, KS および ŚB そして TB の伝える次の三つである。

3-6-1. MS 1, 10, 17 [156, 15–17], KS 36, 11 [78, 3–5]。

> Sākamedha 祭の十二の献供（注 25 を参照）によって一年や季節は満足させられたが，祖霊達は満足させられていなかった。この祖霊祭によって祖霊達は祭られ，満足させられた。

3-6-2. ŚB 2, 6, 1, 1–3。

> そこでかの（Asura 達との）戦いでこれら（神々）のうちで，彼等（Asura 達）が殺した者達を，彼ら（神々）は祖霊祭で生きかえらせた。それらが祖霊達である。それ故に祖霊祭と名付けられる。春，夏，雨季，これらが完全な勝利をおさめた。秋，寒期，冬，これらが，彼ら（神々）が再び生きかえらせた者達。そこでこの者（祭主）がこれ（祖霊祭）を行なうのは，彼に属する者を誰もひとが殺さないようにと，考えてである。神々が行なったと，考えてである。さてこの者（祭主）はこれを行なう。つまりこれら（祖霊達）に対して神々が整えた分け前をこれらに今与えるのである。そして神々が生きかえらせた者達を今元気づけるのである。そして自分自身の祖霊たちをより良い世界へと引き上げるのである。そして彼自身の悪行によって殺されたもの，死んだものが，これによって，彼にとって再び満たされるのである。それ故にこの者（祭主）はこれ（祖霊祭）を行なう。

祖霊祭であるから，死や祖霊と関連するのは当然であろう。この記述によると，ŚB は祖霊祭に対して次の四つの機能を付与している。1. 祖霊達に対して神々が整えた分け前を与えること。2. 神々が生きかえらせた者達（つまり祖霊達？）を元気づける

こと。3. 祖霊達をより良い世界へと引上げること。4. 自分が行なった死をもたらすような悪行を償うこと。

3-6-3. TB 1, 4, 10, 8 は一貫して行なう思弁的解釈として，この祖霊祭に対して次のように説く。つまりこの祖霊祭によって祖霊達のいる世界を勝ち取り，祖霊達と一緒にいる状態に赴くと。

3-7. Tryambaka 祭に関して

Sākamedha 祭の二日目の午後，祖霊祭の後で行なわれる Rudra に対する Tryambaka 祭を MS/KS そして ŚB, TB は次のように解釈する。

3-7-1. MS 1, 10, 20 [159, 14–16], KS 36, 14 [80, 14–16]。

> 祭主にとって，年や季節は満足させられたが，Rudra 達は満足させられていない。この Tryambaka 祭によって Rudra 達は祭られ，満足させられる。

3-7-2. ŚB 2, 6, 2, 1–2。

> そこでかの（Asura 達との）戦いでこれら（神々）のうちで矢が当たった者達の鏃を，Tryambaka 祭を行なって，これ（Tryambaka 祭）によって取り出した，引き抜いた。そこでこの者（祭主）はこれ（Tryambaka 祭）を行なう。それは，彼に属する誰にもそのように矢が当たらないようにと，考えてである。神々が行なったからと，考えてまたこの者はこれを行なう。彼（祭主）の既に生まれた子孫，まだ生まれていない（子孫），その二種類の（子孫）を Rudra の影響 (rudriya) から解きはなつのである。彼のそれら生類は病なく，災なくつぎつぎと生まれてくる。それ故に彼（祭主）はこれ（Tryambaka 祭）を行なう。

ŚB はこのように Tryambaka 祭に対して 1. 矢が当たらないということ，2. Rudra のもたらす悪しき災 (rudriya) から生類を解放することの二つの機能を認めている。

3-7-3. TB 1, 4, 10, 9。

> そこで草 (oṣadhi) 達はこの神 (Rudra) を Tryambaka 祭によって祭った，「我々は広まりたい」と考えて。それからそれら（草）は広がった。このように知って，Tryambaka 祭を行なう者は子孫と家畜をともなって広がる。

つまり Rudra を祭ることによって，子孫と家畜の繁栄を得るということを説いていると考えてよいであろう。

3-8. Śunāsīrīya 祭に関して

上にも述べたように，古い Brāhmaṇa 文献，つまり MS, KS は，Cāturmāsya 祭を Vaiśvadeva 祭，Varuṇapraghāsa 祭，Sākamedha 祭の三つの祭式よりなるものと見なし，第四の祭式である Śunāsīrīya 祭をその一連の解釈より除いている。そして TB, ŚB も原則としてこの見解を支持していた[11]。つぎに挙げるのは ŚB, GB=

11) 前記注 3) を参照。

KB, TB の伝える解釈である。

3-8-1. ŚB 2, 6, 3, 2 によると Śunāsīrīya 祭の解釈は以下のようである。

> そこで Śunāsīrīya 祭を行なうべき理由とは：Sākamedha 祭を行ない完全な勝利を得た神々の栄光 (śrī)，それは śuna である。勝ち取られた年 (saṃvatsara) のエッセンス (rasa) は sira である。つまり Sākamedha 祭を行ない完全な勝利を得た神々の栄光と，勝ち取られた年のエッセンス，その両者をいま囲み取り，自分の中に置くのである。それ故に，Śunāsīrīya 祭を行なう。

ほぼ同文の解釈を ŚB 2, 6, 3, 4 は Śunāsīrīya 祭の，五つの共通献供の解釈に際しても与えている。「完全な勝利を得た神々の栄光と，勝ち取られた年のエッセンス」を自分のものにするというのである。

KB 5, 8 [22, 5–6] (5, 10, 1–3) および GB 2, 1, 26[163, 15–164, 1] によると，閏年の十三番目の月が年そのものと同じであるという観念にもとづいて，Śunāsīrīya 祭を行なう者は年そのものを得ると説明する。KB の例は次のようである。

> Śunāsīrīya 祭を行なうと，十三番目の月を得る。年はこの十三番目の月と同じ大きさ。つまりここで欠けることのない年が得られるのである。

3-8-2. TB 1, 4, 10, 9 は一連の解釈の最後のところで，Śunāsīrīya 祭を行なう者は Vāyu（風）のいる世界を勝ち取るという。

3-9. ま と め

それぞれの Brāhmaṇa 文献による Cāturmāsya 祭の解釈の分析の第四の方法に移る前に，つまり，個々の細かい祭式行為の一つ一つに対する解釈を検討する前に，今までに行なってきた三つの方法による検討の結果をまとめてみると次のようになる。

1. Cāturmāsya 祭全体
   - 1–1. Prajāpati による Asura の駆逐と，生類の創造：(MS, KS, TB)。
   - 1–2. 年の獲得，季節の獲得：(ŚB, TB 1, 4)。
   - 1–3. 治療祭式：(KB, GB)。
2. Cāturmāsya 祭を構成する各祭式の名称を列挙しての Cāturmāsya 祭の解釈
   - 2–1. Vaiśvadeva 祭：生類の創造：(MS, KS, TB, ŚB)。
   - Varuṇapraghāsa 祭：生類を Varuṇa に捉えさせる：(MS, KS). Varuṇa の枷よりの解放：(TB, ŚB)
   - Sākamedha 祭：Vṛtra 殺し：(MS, KS, ŚB)。祭主の安定：(TB)
   - 2–2. 各祭式による4カ月の獲得：(MS, KS, TB, ŚB)。
   - 2–3. 各祭式による saṃvatsara, parivatsara, idāvatsara, anuvatsara の獲

得：(TB 1, 4)。saṃvatsara の獲得 (GB)。

2–4.　三つの祭式による三つの世界における安定：(TB 1, 4)。

3.　季節毎の各祭式などに対する個別的解釈。

3–1.　Vaiśvadeva 祭

3–1–1.　生類の創造。家畜の繁栄：(MS, KS, TB, ŚB, KB, GB)。

3–1–2.　年を満足させる：(KB, GB)。

3–2.　五つの共通な献供

3–2–1. 3–2–2. 3–2–3　生類の創造：(MS, KS, TB, ŚB)。

3–2–4.　Vṛtra 殺し：(MS, KS, ŚB)。Asura の征服：(TB)。

3–2–5.　各神格を満足させる：(KB, GB)。

3–3.　Varuṇapraghāsa 祭

3–3–1.　困窮を祭によって取り除く：(MS, KS)。

3–3–2.　Varuṇa の枷から解放する：(TB, ŚB, KB, GB)。

3–3–3.　Āditya 神の世界の獲得：(TB 1, 4)。

3–4.　Sākamedha 祭

3–4–1.　Vṛtra 殺し：(KS, ŚB)。

3–4–2.　Indra 神の祭式：(KB, GB)。

3–4–3.　Mahāvrata 祭：(KB, GB)。

3–4–4.　月の世界の獲得：(TB 1, 4)。

3–5.　Mahāhavis

3–5–1.　Vṛtra 殺し：(ŚB)。

3–5–2.　繁殖と栄光の獲得：(ŚB)。

3–6.　祖霊祭

3–6–1.　祖霊達を満足させる：(MS, KS)。

3–6–2.　祖霊達に神々の分け前を与える。神々が生きかえらせた者を元気づける。祖霊達をより良い世界へ引上げる。死をもたらす悪行を償う：(ŚB)。

3–6–3.　祖霊達の世界を勝ち取る：(TB 1, 4)。

3–7.　Tryambaka 祭

3–7–1.　Rudra 達を満足させる：(MS, KS)。

3–7–2.　矢が当たらないこと，Rudra の悪しき災から生類を解放する：(ŚB)。

3–7–3.　子孫と家畜の繁栄：(TB 1, 4)。

3–8.　Śunāsīrīya 祭

表1　本論文1.～3. で扱った解釈項目に対するテキスト間の関係

1. MS, KS, TB	(1-1)	3-3. MS, KS	(3-3-1)
SB, TB 1, 4	(1-2)	TB, SB, KB, GB	(3-3-2)
KB, GB	(1-3)	TB 1, 4	(3-3-3)
2. MS, KS		3-4. KS, SB	(3-4-1)
TB		KB, GB	(3-4-2)
SB	(2-1)	——	
——		KB, GB	(3-4-3)
MS, KS, TB, SB	(2-2)	TB 1,4	(3-4-4)
TB 1, 4, GB	(2-3)	3-5. SB	(3-5-1)
——		——	
TB 1, 4	(2-4)	SB	(3-5-2)
3-1. MS, KS, TB, SB, KB, GB	(3-1-1)	3-6. MS, KS	(3-6-1)
——		SB	(3-6-2)
KB, GB	(3-1-2)	TB 1, 4	(3-6-3)
3-2. MS, KS, TB, SB	(3-2-1 / 3-2-2 / 3-2-3)	3-7. MS, KS	(3-7-1)
——		SB	(3-7-2)
MS, KS, SB	(3-2-4)	TB 1, 4	(3-7-3)
KB, GB	(3-2-5)	3-8. SB, KB, GB	(3-8-1)
		TB 1, 4	(3-8-2)

注　線は，同じテキストが同一のテーマに対して二つ以上の解釈を示している際にほどこした。

3–8–1.　神々の栄光と年のエッセンスの獲得。完全な年の獲得：(ŚB, KB, GB)。

3–8–2.　Vāyu 神の世界の獲得：(TB 1, 4)。

以上のまとめから，各項目に対するテキスト間の関係のみを取り出してみると，表1のようになる。

この表から次のことが言えると思う。

1.　いろいろなテキストの対の中で，MS と KS は3-4以外の場合に，また KB と GB は2-3以外の場合に，対をなしている時には常に対をなしているので，MS と KS, KB と GB はそれぞれ互いに極めて緊密な関係にある。TB, ŚB, TB 1, 4 は各々独立していたり，それぞれが別なものと対をなしていたりするため，一応独自なテキストとみなしてよい。そして，これら TB, ŚB, TB 1, 4 の他のテキストとの結び付きかたをも考慮にいれると，これらのテキストは，MS と KS, TB, ŚB, TB 1, 4, 及び KB と GB という5つのグループに分けることができる。しかしこの結論はなにも目新しいものでなく，既に文学史において常識となっていることである。

2.　しかし TB 1, 4 の出方をみてみると，つまり，このテキストが他のテキストと結びつくときは，ŚB とであったり (1), GB とであったり (2–3) し，また古いと

される MS, KS, TB 1, 6 が扱わず，新しいとされる ŚB, KB, GB のみが扱っているテーマをも扱っているため，この TB 1, 4 は ŚB, KB, GB と同じく新しい層に属し，TB 1, 6 に対する補遺のようなものとみなすことができる。この TB 1, 4 に対する主張は新しい知見ということができると考えられる。

3. 3–8 の Śunāsīrīya 祭を扱うのが ŚB, KB, GB, TB 1, 4 といった新しい層のテキストであるということも，既知の事実，つまり古層のテキストでは Cāturmāsya 祭は Vaiśvadeva 祭，Varuṇapraghāsa 祭，Sākamedha 祭の三つからなるとされるのにたいして，新層のテキストは第四番目の祭式として Śunāsīrīya 祭をも Cāturmāsya 祭の正規の構成要素とみなしているという事実の再確認にすぎない。

各項目に対するテキスト間の関係の検討から，Cāturmāsya 祭を解釈する Brāhmaṇa 文献は MS と KS, TB, ŚB, TB 1, 4 そして KB と GB という五つのグループに分けられることが明らかになった。そして，それらのグループは大なり小なり異なった解釈を Cāturmāsya 祭全体に，またはそれを構成する各祭式やテーマに対して与えているため，Cāturmāsya 祭に対して Brāhmaṇa 文献全体に共通する統一的解釈を想定することは，本来不可能なことであるのかもしれない。

この留保条件付きで，以上のまとめから中間的な結論として，Cāturmāsya 祭に対する Brāhmaṇa 文献の解釈像として一応次のことを提示したい。Vaiśvadeva 祭により生類を創造し，その際に五つの共通する献供の諸神格はその生類の創造を助ける。Varuṇapraghāsa 祭によって，創造された生類を，Varuṇa の悪しき影響より解放する。Sākamedha 祭により Vṛtra を殺したり Asura 達を征服したりし，その際に五つの共通する献供の諸神格は Vṛtra 殺しまたは Asura の征服の援助を行なう。祖霊祭により祖霊を祭り，Tryambaka 祭により Rudra の悪しき影響を排除し，Śunāsīrīya 祭により完全な年を獲得する。そして Cāturmāsya 祭全体としては，MS と KS および TB によれば Prajāpati による Asura の駆逐と生類の創造が行なわれ，ŚB, TB 1, 4 によると年や季節が獲得され，KB, GB によると，この祭式は治療祭式であるという。以下において，各祭式の個々の祭式行為に対する解釈の検討を行ない，今中間的結論として提示したこの解釈像との比較を行なうこととする。

4. 各祭式の個々の祭式規定に対する解釈

個々の祭式行事に対する解釈はおおむね次のような形式を取る。解釈をほどこすべき規定が提示され，次に解釈の根拠となる等置関係や，かなり短い神話的主張，または実際の観察にもとづく命題が不変化詞 vai に導かれて与えられ，最後に不変化詞

eva を伴う解釈の部分がくる。時にはこの後に不変化詞 hi による根拠の再確認が行なわれることもある。今の場合，結果としてどのような祭式解釈を Brāhmaṇa 文献が与えているかということに考察の中心を絞るので，考察の対象となるのは不変化詞 eva を伴う解釈の部分であり，それ自身極めて興味のある話題であるが，解釈の根拠を与える vai または hi を伴う文の考察は必要最小限度にとどめることにする。

4-1. Vaiśvadeva 祭の個々の祭式規定に関して

A. 分　析

4-1-1. 一切神 (Viśve devāḥ) に対する āmikṣā/payasyā（凝乳）について。

4-1-1-1. sāṃnāyya（ヨーグルトにあたためた乳を混ぜたもの）に関する短い神話的言明にもとづき「栄える」(ṛdhnoti) という。MS 1, 10, 5 [146, 2–5], KS 36, 1 [68, 5–6]。

4-1-1-2. āmikṣā の材料の dadhi（ヨーグルト）と śṛta（あたためた乳）が mithuna（生産に結びつく一対）であることにもとづき，「つぎつぎと生れる」(prajāyate) MS 1, 10, 6 [146, 6–8], KS 36, 1 [68, 7–9], ŚB 2, 5, 1, 16,「祭主は子孫を栄えさせる」TB 1, 6, 2, 3–5 という。

4-1-1-3. āmikṣā の中に vājina（乳漿）を注ぐことに関して，「生まれた生類に精液を置く」TB 1, 6, 2, 5 とする。

4-1-2. Marut 神に対する七皿の puroḍāśa について。

4-1-2-1. 生類に災をなす Marut 神の神話にもとづき，「独立 (svatva) のため」,「和解 (niṣkṛti) のため」MS 1, 10, 6 [146, 11–13], KS 36, 1 [68, 11],「祭式を整えるため，生類が殺されないため」TB 1, 6, 2, 2–3,「生類の不殺生のため」ŚB 2, 5, 1, 12–14。

4-1-2-2. Marut＝家畜の等置にもとづき，家畜が次々と生まれること。MS 1, 10, 6 [146, 13], KS 36, 1 [69, 1]。

4-1-2-3. Marut 神に分け前を与え宥め (niravatti)，村の食物を手にいれる。MS 1, 10, 6 [146, 13–15], KS 36, 1 [69, 1–2]。

4-1-2-4. 祭主のため，一括して庶民を整える。TB 1, 6, 2, 3。

4-1-2-5. Marut 神は恐ろしい (ghora-) という神話的主張にもとづき，「治療が行なわれる」KB 5, 2 [18, 21–22] (5, 2, 14–15)，または Marut 神を満足させる。GB 2, 1, 20 [157, 9–10]。

4-1-3. 天地両神に対する一皿の puroḍāśa について。

4-1-3-1. 創造された生類をまわりから摑む。MS 1, 10, 7 [146, 16–17], KS 36, 1

[69, 2–4], TB 1, 6, 2, 5, ŚB 2, 1, 5, 17。

4-1-3-2. Prajāpati のもとにおいて安定する。MS 1, 10, 7 [146, 17–18], KS 36, 1 [69, 4–5]。または，単に安定のため。KB 5, 2 [18, 23–24] (5, 2, 19–20), GB 2, 1, 20 [157, 12–13]。

これ以下の 4–1–3–3 から 4–1–3–9 までの解釈は祭主＝一皿の puroḍāśa の等置にもとづく。

4-1-3-3. これを祭筵に置くことは祭主を安定させること。KS 36, 1 [69, 10–11]。

4-1-3-4. この puroḍāśa は一部を切り取らずに，全部を献供するのは供物たる祭主を天界に行かせること。MS 1, 10, 7 [146, 18–19], KS 36, 1 [69, 5–6]。

4-1-3-5. 東の祭火 āhavanīya に献じることは祭主を天界に行かせること。TB 1, 6, 3, 6–7。

4-1-3-6. その供物をまっすぐ献じることは，祭主を安定させること。MS 1, 10, 7 [146, 19–147, 2], KS 36, 1 [69, 11–13]。

4-1-3-7. 一部を切り取らずに全部を献供するのは，祭主を安定させること。MS 1, 10, 7 [147, 2] (TB 1, 6, 3, 5–6 は，もしこの供物から切り取ると，祭主から切り取ることとなり，祭主が早死するという)。

4-1-3-8. 献供した後に上から溶けたバターをかけることは，天界に赴いた祭主に光輝 (tejas) を与えること。TB 1, 6, 3, 6。

4-1-3-9. 祭匙 (sruc) で献供を行なうのは，天界を獲得するため。TB 1, 6, 3, 7。

4–1–3–10, 4–1–3–11 の二つの項目は，祭式の順序からすると，この供物の献供よりかなり以前の行為，つまりこの供物を調理した後，器 (pātrī) に移して，その中に溶けたバターを注ぐこと (āghāraṇa) に関してである。

4-1-3-10. 溶けたバターを注ぎ入れることは，祭主に光輝 (tejas) を与えること。TB 1, 6, 3, 4。

4-1-3-11. 溶けたバターの量に関して，MS 1, 10, 7 [147, 2–6], KS 36, 1 [69, 6–10] は供物が隠れてしまうほどタップリ注ぐとし，TB 1, 6, 3, 4–5 は供物の背中が残るほどの量を注ぐとし，ともに祭主に家畜が繁栄するためという。

4-1-3-12. 供物がまっすぐ祭火の中央に落ちずに，ずれて落ちた際に，そのずれた方向に関して次のようにいう。MS 1, 10, 7 [147, 6–9] 東：祭主が早死する。南：彼の子孫を祭火が焼く。西：祭主の妻が早死する。北：祭主の家畜を祭火が焼く。裏返る：雨が降らなくなる。そこで再び取ってバターをかけて献供するが，それは祭主を安定させるため。TB 1, 6, 3, 7–8 東：天界を勝ち取る。南：祖霊

の世界を。西：rakṣàs 達が祭式を破壊する。北：人間の世界を勝ち取る。そこでずれることなく献供すると，天地が，季節が，祭式が，祭主が，そして子孫が順次安定する。

4-1-3-13. 上の場合，再び取って献供するが，そのさい祭官に報酬として任意の物 (vara) を与えるが，それは「vara によって vara に触れる」(？) とされる。MS 1, 10, 7 [147, 9–10]。

4-1-4. 祭筵を準備する際に，刈ったチガヤ (darbha) を先ず三つの束にし，それを更に一つに束ねる。この祭筵の束の作り方に関して。

4-1-4-1. 三重 (trivṛt) であるのは，父，母，子という三つからなる対 (mithuna) と，羊膜 (ulba)，胎児 (garbha)，絨毛膜 (jarāyu) という三つからなる対が実現する。TB 1, 6, 3, 1。

4-1-4-2. 三つの束にするのは，三界（地上，虚空，天界）に安定するため。TB 1, 6, 3, 1。

4-1-4-3. それを更に一束にするのは，この世界（地上）に安定するため。TB 1, 6, 3, 1–2。

4-1-4-4. ŚB 2, 5, 1, 18 によると三束にして，更に一束にするのは，出産 (prajanana) の姿。

4-1-5. 祭火の鑽出に関して。
MS 1, 10, 7 [147, 11–13], KS 36, 2 [69, 17–18], TB 1, 6, 3, 3, ŚB 2, 1, 5, 19, KB 5, 1 [18, 13–14] (5, 1, 16–18), GB 2, 1, 19 [156, 12–14] は出産 (prajanana, prajāti)，子孫の誕生に関連づけている。

4-1-6. 春に傾斜のある祭場で行なうのは，prajanana のため。MS 1, 10, 7 [147, 13–14], KS 36, 2 [69, 16–17]。

4-1-7. uttaravedi を作らないのは prajanana のため。MS 1, 10, 7 [147, 14], KS 36, 2 [69, 16–17]。

4-1-8. 祭具に用いる草は新芽をつけたものが用いられるのは，「私に次々（子孫）が生まれるように」するため。MS 1, 10, 7 [147, 14–15], KS 36, 2 [69, 16]。生まれたばかりの繁栄 (prathamaja-puṣṭi) を得るため。TB 1, 6, 3, 2。または prajanana のため。ŚB 2, 1, 5, 18。

4-1-9. 祭式の報酬 (dakṣiṇā) として若い牝牛が始めて生んだ仔牛を与えるのは，栄えるため (samṛddhi)。TB 1, 6, 3, 2。

4-1-10. 中心となる献供の前後にそれぞれ九つの前祭 (prayāja) と九つの後祭

(anuyāja) が行なわれるのは誕生 (prajanana) のため。ŚB 2, 5, 1, 20。

4-1-11. prayāja, anuyāja において供物としてヨーグルトと溶けたバターを混ぜたもの (pṛṣadājya) を用いることに関して。

4-1-11-1. 家畜を獲得するため。TB 1, 6, 3, 2。

4-1-11-2. 栄えるため。(samṛddhi) 。TB 1, 6, 3, 2–3。

4-1-11-3. pṛṣadājya はヨーグルトとバターからなり，それが対をなし，その対より祭主に子孫と家畜が次々と生まれる。MS 1, 10, 7 [147, 16–19], KS 36, 2 [69, 19–21]。

4-1-11-4. pṛṣadājya を供物として祭匙に汲み出す時，始めにバターを下に敷き，それを汲み，最後に上からバターを注ぐ。春に祭る時は（つまり Vaiśvadeva 祭では）二回下に敷き，一回上から注ぐが，それは家畜を草の中に安定させるため。雨季に祭る時は（つまり Varuṇapraghāsa 祭では）一回下に敷き，二回上から注ぐが，それは十分な雨を家畜に与えるため。MS 1, 10, 7 [147, 19–148, 2], KS 36.2 [69, 21–70, 1]。

4-1-12. 中心的献供が行なわれる前に祭火に十七本の薪木 (samidh) をくべ，十七の薪木の祭歌 (sāmidhenī) を唱えるのは，Prajāpati を得るため。GB 2, 1, 19 [156, 14–15]。

4-1-13. 八つの主要献供と乳漿の献供の九つの献供が行なわれるのは，「そこから次々と生まれる」ため。MS 1, 10, 8 [148, 3–4], KS 36, 2 [70, 1–3]。

4-1-14. 九つの prayāja，九つの anuyāja，八つの献供，九番目に乳漿 (vājina) を献じるのは，星宿 (nakṣatra) 的 virāj[12] を得るため。KB 5, 1 [18, 15–16] (5, 1, 20–21), GB 2, 1, 19 [156, 17–157, 2]。

4-1-15. 献供の総数として別の見解は三十を想定し，三十の音節からなる韻律 virāj と関係づけて解釈を行なう。

4-1-15-1. virāj は誕生 (prajanana) と等置され，virāj なる母胎より祭主に次々と生まれる。MS 1, 10, 8 [148, 4–8], KS 36, 2 [70, 3–7]。

4-1-15-2. virāj＝食物 (anna) という等置にもとづいて virāj により食物を得る。TB 1, 6, 3, 3–4。

一月は三十夜。月は年。年は Prajāpati という等置にもとづいた解釈。

4-1-15-3. Prajāpati と virāj なる母胎という対より祭主に次々と生まれる。MS 1, 10, 8 [148, 8–10], KS 36, 2 [70, 6–8]。

12) nakṣatra 的 virāj，つまり星宿の輝きに比される繁栄に関して，[Weber 1862: 279] を参照。

4-1-15-4. 敵対者より年を奪う。MS 1, 10, 8 [148, 10–12], KS 36, 2 [70, 8–10]。

4-1-16 主要献供の直後に行なわれる Agni sviṣṭakṛt 献供の際に唱えられる神々に呼びかける祭文 (puronuvākyā) と献供の祭文 (yājyā) として韻律 virāj の詩句を用いるのは，食物の栄光 (śrī) を得るため。GB 2, 1, 19 [156, 16–17]。

4-1-17. Vaiśvadeva 祭の最後の献供である乳漿 (vājina) の献供に関して。この献供の祭神は戦車に繋がれる馬 (vājin) であり，多くの解釈がこの馬をめぐってなされる。

4-1-17-1. この戦車馬＝家畜の等置にもとづいて，家畜を祭ること，MS 1, 10, 9 [149, 12–13], KS 36, 4 [71, 13]，または家畜を満足させることとされる。GB 2, 1, 20 [157, 13–14]。

4-1-17-2. この戦車馬＝神々の馬の等置にもとづいて，神々の馬を満足させその結果神々が満足するとされる。KB 5, 2 [19, 1–2] (5, 2, 24–26), GB 2, 1, 20 [157, 15–17]。

4-1-17-3. 戦車馬＝Agni, Vāyu, Sūrya の等置にもとづきこれら三柱の神々を祭ること。TB 1, 6, 3, 9。

4-1-17-4. 戦車馬＝韻律 (chandas) の等置にもとづき，韻律を祭ること，MS 1, 10, 9 [149, 13–14], TB 1, 6, 3, 9，または韻律を満足させること GB 2, 1, 20 [157, 15] とされる。

4-1-17-5. 戦車馬＝季節の等置にもとづき，季節を満足させること。KB 5, 2 [18, 2–3] (5, 2, 27–28), GB 2, 1, 20 [157, 14–15)]。

4-1-17-6. 戦車馬は家畜と同じなので，この献供を普通の祭式の次第に従って終了させると，家畜そのものをも終了させてしまう。つまり，死に絶えさせてしまうので，終了させない。その結果，家畜が次々と生まれてくる。MS 1, 10, 9 [149, 14–15], KS 36, 4 [71, 16–17]。

4-1-17-7. 祭火のまわりに置いた木 (paridhi) をとりはらって献供を行なうのは，Indra 神の二頭の馬に轡をはずして飼葉を与えること。TB 1, 6, 3, 9–10。

4-1-17-8. 普通の献供の際のように献供の祭文 (yājyā) の直後に vaṣat の声を挙げずに，「Agni よ，乳漿を味わえ」(vājinasyāgne vīhi) と唱えるのは，祭式完成 (samiṣṭi) と安定のため。MS 1, 10, 9 [149, 17], KS 36, 4 [71, 15–16]。

4-1-17-9. 祭筵に乳漿をこぼしながら祭匙につぐのは，牡牛に精液を置くこと，MS 1, 10, 9 [149, 18], KS 36, 4 [71, 17–18]，または生類に精液を置くこと。TB 1, 6, 3, 10。

4-1-18.　乳漿の残りを各方位に向けて注ぐのは各方位をエッセンス (rasa) によって湿らせるためであり，最後に東の方に注ぐのは，東の方に再び向かうため（？）である。MS 1, 10, 9 [150, 1–4]。

4-1-19.　この献供の後で乳漿を食べることに関して，祭官達が食べるのは，「戦車馬が私の祭式を運んでくれるように」と願ってであり，同じ量だけ食べるのは，人々が戦利品 (vāja) を等しく分けるようにであり，祭主自らも食べるのは，自分の中に戦利品を置くため。MS 1, 10, 9 [150, 1–4], KS 36, 4 [71, 19–21]。祭主が食べるのは，自分の中に精液を置くことであり，祭主の中に家畜達を安定させるため。TB 1, 6, 3, 10。

B.　まとめ

以上のように，Vaiśvadeva 祭の個々の祭式行為に対する解釈のうち，この祭式の機能，または効果の説明に該当する五十四個の項目を要約してみた。Cāturmāsya 祭を構成する各祭式の名称を列挙して Cāturmāsya 祭を解釈する際，2-1で Vaiśvadeva 祭に対しては生類の創造という機能が想定され，各祭式に対する個別的な解釈の場合は，3-1-1において生類の創造，家畜の繁栄という機能が，3-1-2においては年の獲得という機能が想定されていた。個々の祭式行為に対する解釈と，全般的な解釈の間にどのような関係があるかを明確にするため，上の五十四個の項目を次のように再度グループ分けしてみる。

1.　生類の創造に対応する項目として次のものが考えられる。

祭主に子孫や家畜が次々に生まれる (prajāyate): 4–1–1–2 (MS, KS), 4–1–8 (MS, KS), 4–1–13 (MS, KS), 4–1–15–1 (MS, KS), 4–1–15–3 (MS, KS)。[五項目]

誕生 (prajanana または prajāti) のため：4–1–4–4 (ŚB), 4–1–5 (MS, KS, TB, ŚB, KB, GB), 4–1–6 (MS, KS), 4–1–7 (MS, KS), 4–1–8 (ŚB), 4–1–10 (ŚB)。[六項目]

一対 (mithuna) より子孫と家畜の誕生：4–1–11–3 (MS, KS)。[一項目]

mithuna の実現：4–1–4–1 (TB)。[一項目]

生類などに精液を置く：4–1–1–3 (TB), 4–1–17–9 (TB/MS, KS 牡牛に), 4–1–19 (TB 祭主自身に)。[三項目]

これ以外に，生類をまわりから摑むとする 4–1–3–1 (MS, KS, TB, ŚB), 生類に対して悪しき振舞をする Marut 神を宥めたり，彼等の悪しき影響より生類を守るとする 4–1–2–1 (MS, KS/TB), 4–1–2–3 (MS, KS), 4–1–2–5 (GB) の項目もここにいれることにする。[四項目]

2.　家畜の繁栄に関するものとして次のものがある。

家畜が次々に生まれる：4–1–2–2 (MS, KS), 4–1–17–6 (MS, KS)。[二項目]

家畜の繁栄：4–1–3–11 (MS, KS, TB)。[一項目]

家畜の獲得：4–1–11–1 (TB)。[一項目]

家畜を草の中に安定させる：4–1–11–4 (MS, KS)。[一項目]

家畜を祭る／満足させる：4–1–17–1 (MS, KS/GB)。[一項目]

1. に分類した項目のいくつかのものがこの第二の家畜に関する項目とも関係している。

3.　本稿の1011頁に要約して紹介した ŚB 2, 5, 1, 1–7 の長い神話では Prajāpati の行なった最初の三回の創造は，食物がないため失敗したといわれ，創造された生類の維持には食物が必要であるとされる。この点に関しては，村の食物を手にいれるためとする 4–1–2–3 (MS, KS)，食物を得るためという 4–1–15–2 (TB)，食物の栄光 śrī の獲得のためとする 4–1–16 (GB) の三項目が考えられる。

4.　生類が創造され，つまり祭主にとって子孫が次々と生まれ，家畜が繁栄し，生存の基盤である食物が確保されると，祭主は栄えることとなる。4–1–1–1 (MS, KS) は端的に「栄える」(ṛdhnoti) という。4–1–9 (TB), 4–1–11–2 (TB) によると，繁栄 (samṛddhi) のためであり，4–1–1–2 (TB) は「祭主は子孫を栄えさせる」という。4–1–8 (TB) によると「生まれたばかりの繁栄 (prathamaja- puṣṭi-)(?)」を得るとし，4–1–14 (KB, GB) によると星宿 (nakṣatra) 的 virāj (注12を参照) を獲得するという。

5.　このように祭主にとって善き状態を招来することを Brāhmaṇa 文献はあと一つの表現を用いて現わす。つまり「祭主が安定する」というのである。

祭主を安定させる：4–1–3–3 (KS), 4–1–3–6 (MS, KS), 4–1–3–7 (MS, KS), 4–1–3–12 (MS, TB)。[四項目]

安定 (pratiṣṭhā) のため：4–1–3–2 (KB, GB)。[一項目]

Prajāpati のもとにおいて安定する：4–1–3–2 (MS, KS)。[一項目]

三界に安定させる：4–1–4–2 (TB)。[一項目]

地上に安定させる：4–1–4–3 (TB)。[一項目]

以上いくつかの重複はあるが，五つのグループに分けた四十三個の項目の結果を次のようにまとめてみる。つまり祭主に子孫が次々と生まれ，家畜が繁栄し，食料が確保され，その結果，祭主は栄え，安定する，と。

6.　まだ触れていない残りの二十二の項目は次のような内容である。先ず，すべての

ものの基礎ともいうべき祭式そのものについて，それを整え 4–1–2–1 (TB)，完成させ (samiṣṭi) 4–1–17–8 (MS, KS)，戦車馬 (vājin) がそれを運ぶことを願う 4–1–19 (MS, KS)。祭式によってはたらきかける対象である諸神格については，Prajāpati を獲得したり 4–1–12 (GB), Agni, Vāyu, Sūrya 神達を祭ったり 4–1–17–3 (TB)，神々の馬を満足させ，神々をも満足させ 4–1–17–2 (KB, GB), Indra 神の二頭の黄色の馬 (hari) に飼葉を与え，韻律を祭ったり，満足させたりする 4–1–17–4 (MS, TB/GB)。時間的，空間的要素については，年を敵対者から奪い 4–1–15–4 (MS, KS)，季節を満足させ 4–1–17–5 (KB, GB)，各方位をエッセンス (rasa) で潤す 4–1–18 (MS)。そして再び祭主に関連して，彼のために庶民を整え 4–1–2–4 (TB)，彼に光輝 (tejas) を与え 4–1–3–10 (TB)，戦利品を平等に分配し 4–1–19 (MS, KS), 戦利品を祭主の中に置き 4–1–19 (MS, KS), vara により vara に触れる 4–1–3–13 (TB)。更に祭主を天界に行かせ 4–1–3–4 (MS, KS), 4–1–3–5 (TB), 天界を獲得させ 4–1–3–9 (TB), 4–1–3–12 (TB), 天界に行った祭主に tejas をあたえる 4–1–3–8 (TB)。そして治療が行なわれる 4–1–2–5 (KB)。

これらの内容は多岐にわたり，そこからどのような像を描けばよいかわからないが，このような解釈もあるということを念頭に置き，Vaiśvadeva 祭は子孫と家畜の誕生と，豊かな食料によるすこやかな成長を基礎とした祭主の安定した繁栄を可能ならしめるということを一応の結論として主張したい。

4-2. Varuṇapraghāsa 祭の個々の祭式規定に関して

A. 分　析

Varuṇapraghāsa 祭に対して 2–2–2 では生類を Varuṇa に捉えさせる (MS, KS)，または生類を Varuṇa の枷より解放する (TB, ŚB) とし，3-3 では困窮 (aṁhas) をこの祭式によって取り除く (MS, KS), または生類を Varuṇa の枷より解放する (TB, ŚB, KB, GB), 更には Āditya 神の世界を獲得する (TB 1, 4) などと解釈されていた。

つぎにこの Varuṇapraghāsa 祭の個々の祭式行為に対する解釈を検討する。

4-2-1. Indra, Agni 両神に対する十二皿の puroḍāśa について。

4-2-1-1. 一切神にかなうため (vaiśvadevatva)。KS 36, 5 [72, 9–10]。

4-2-1-2. Indra 神，Agni 神＝力 (ojas, vīrya/ojas, bala/bala, tejas) の等置にもとづいて，「ojas と vīrya が生類の中央に置かれる」。MS 1, 10, 10 [150, 14–17], KS 36, 5 [72, 12–13]。「ojas と bala を手に入れる」。TB 1, 6, 4, 4。bala を tejas の中に安定させる。GB 2, 1, 22 [159, 1–2]。

4-2-1-3. Indra 神，Agni 神＝呼気 (prāṇa)，吸気 (apāna) の等置にもとづいて，「呼気と吸気が生類の口のところに (mukhataḥ) 置かれる」。MS 1, 10, 10 [150, 17–19], KS 36, 5 [72, 10–12]。「呼気と吸気を自分のものにする」。TB 1, 6, 4, 3–4。「呼気と吸気を生類の中に置く」。ŚB 2, 5, 2, 8。

4-2-1-4. Indra 神，Agni 神＝安定 (pratiṣṭhā) の等置にもとづいて，「安定のために」。KB 5, 4 [19, 17–18] (5, 4, 10–11)。

4-2-2. Marut 神および Varuṇa 神に対する凝乳 (āmikṣā/payasyā) に関して。

4-2-2-1. 両神に対して凝乳が用いられるのは，「両方のところで Varuṇa の枷より生類をときはなつ」ため。ŚB 2, 5, 2, 9。

4-2-2-2. Marut 神へ凝乳を献じるのは，「分け前を与えて宥めるため」(niravatti)。MS 1, 10, 10 [150, 19–20], KS 36, 5 [72, 14]。「南の方から生類を殺そうとした Marut 神を分け前によって静める」ため。ŚB 2, 5, 2, 10。

4-2-2-3. Varuṇa 神へ凝乳を献じるのは，「Varuṇa 神との関係を絶つ」(nirvaruṇatva) ため。MS 1, 10, 10 [150, 20], KS 36, 5 [72, 14]。「Varuṇa の枷より生類をときはなつ」ため。ŚB 2, 5, 2, 10。

4-2-3. Ka 神に対する一皿の puroḍāśa にに関して。

4-2-3-1. 平安な状態 (kantva) のため。MS 1, 10, 10 [150, 20–151, 1], KS 36, 5 [72, 14–15], TB 1, 6, 4, 5。「平安 (kam) を生類に行なう」ため。ŚB 2, 5, 2, 13。平安は幸福 (sukha) であり，「幸福が自分自身の中に置かれる」ため。KB 5, 4 [19, 22–23] (5, 5, 17–18), GB 2, 1, 22 [159, 7–8]。

4-2-3-2. Ka 神＝Prajāpati の等置にもとづき，Prajāpati を満足させるため。KB 5, 4 [19, 21–22] (5, 5, 15–16)。Prajāpati を得るため。GB 2, 1, 22 [159, 67]。

4-2-3-3. 自分自身の生類を Varuṇa よりときはなつため。MS 1, 10, 10, [151, 1–2], KS 36, 5 [72, 15–16]。

4-2-4. karambhapātra (1004頁参照) の献供は祭主と彼の妻によって行なわれるが，その前に祭主の妻に対して夫以外の恋人がいるかいないかの質問がなされる。その質問に関して。

4-2-4-1. 虚偽 (anṛta) から離れ，天則 (ṛta) に，真実 (satya) にいたるため。MS 1, 10, 11 [151, 3–4], KS 36, 5 [72, 16–18] cf. ŚB 2, 5, 2, 20。

4-2-4-2. 嘘の告白を行なうと，最もいとしい者に災が生じる。MS 1, 10, 11 [151, 4–5], KS 36, 5 [72, 18–19], TB 1, 6, 5, 2, ŚB 2, 5, 2, 20。

4-2-4-3. 告白させるのは，祭主の妻を祭式にふさわしいもの (medhya-) にするた

め。MS 1, 10, 11 [151, 5], KS 36, 5 [72, 18–19], TB 1, 6, 5, 2。

4-2-4-4. 恋人の名をいうと，その者を Varuṇa の枷にとらえさせる。TB 1, 6, 5, 2。

4-2-5. karambhapātra の供物とその献供に関して。

4-2-5-1. karambhapātra の供物は，炒らずに生のままの穀物を粉にしたもので作るのは，すべての困窮 (aṁhas) を祭によって取り除くため。MS 1, 10, 11 [151, 5–6], KS 36, 6 [73, 1–2]。

4-2-5-2. もし炒ると，困窮が取り除かれないことになる。MS 1, 10, 11 [151, 6], KS 36, 6 [73, 1–2]。

4-2-5-3. karambhapātra の供物が食器 (pātra) の形をしているのは，食器に関して (pātrebhyaḥ) 生類を Varuṇa からときはなつため。MS 1, 10, 11 [151, 6–8], KS 36, 6 [73, 2–3]。

4-2-5-4. karambhapātra の供物の数が祭主の家族の構成員だけあるのは，一人一人に関して困窮を取り除くため。MS 1, 10, 11 [151, 8], KS 36, 6 [73, 3]。既に生まれている子孫 (prajā) を Varuṇa の枷よりときはなつため。TB 1, 6, 4, 5, ŚB 2, 5, 2, 22。

4-2-5-5. 更にこの karambhapātra の供物の数が祭主の家族の構成員の数より一つ多いのは，胎児のために分け前を与えて (Varuṇa) を宥めるため。MS 1, 10, 11 [151, 8–9], KS 36, 6 [73, 4]。将来生まれるであろう，またはまだ生まれていない子孫を Varuṇa の枷よりときはなつため。TB 1, 6, 4, 5, ŚB 2, 5, 2, 22。

4-2-5-6. 神々を招くため献供の前に唱える祭文 (puronuvākyā) を祭主の妻が唱えると，祭主自身に勇気 (vīrya) がなくなってしまうので，祭主がそれを唱えるのは，自分自身の中に勇気を置くため。TB 1, 6, 5, 3。

4-2-5-7. 献供を伴奏する祭文 (yājyā) を祭主と彼の妻の二人が唱えるのは，勇気を持った状態 (savīryatva) を実現するため。TB 1, 6, 5, 3。

4-2-5-8. いろいろな所で犯した罪がこの献供によって取り除かれるようにという内容の yājyā[13] を唱えるのは，Varuṇa をこの祭りによって宥めるため。TB 1, 6,

13) TB の前提としている yājyā は TS 1, 8, 3, 1, d: yád gráme yád áraṇye yát sabhā́yāṃ yád indriyé/yác chūdré yád aryà énaś cakṛmā́ vayám/yád ékasyā́dhi dhármaṇi tásyāvayájanam asi svā́hā// 「村の中で，森の中で，集会所で，心の中で，奴隷に対して，貴人に対して，ある人の義務に対して我々が犯した罪，汝はその罪を祭りにより除去するものなり，svāhā」。ŚB により解釈されている yājyā は VS 3, 45: yád gráme yád áraṇye yát sabhā́yām yád indriyé/yád énaś cakṛmā́ vayám idā́ṃ tád avayajā́mahe svāhā// 「村の中で，森の中で，集会所で，心の中で我々が犯した罪，それを今我々は祭りによって取り除く，svāhā」。このyājyā に対応するテキストを MS 1, 10, 1 [141, 14-142, 3] および KS 9, 4 [107, 13-15] も伝えている。

5, 3。「我々が犯したどのような罪であれ，そのすべての罪から我々がときはなたれるように」と唱えるのである。ŚB 2, 5, 2, 25。

4-2-5-9. karambhapātra の献供を行なう祭火に関して。東の祭火 āhavanīya に行なうと，祭主を Varuṇa の枷に捉えさせてしまう。Pratiprasthātṛ のための南の vedi (1004頁参照)の祭火に献供すると，祭主の敵対者を Varuṇa の枷に捕えさせる。TB 1, 6, 5, 3–4。

4-2-5-10. 箕 (śūrpa) を使って献供を行なうのは，頭のところで (śīrṣatas) Varuṇa を祭りによって宥める。TB 1, 6, 5, 4。Cf. MS 1, 10, 11 [151, 9–10], KS 36, 6 [73, 4–5], ŚB 2, 5, 2, 23。

4-2-5-11. 祭主と彼の妻が献供を行なうのは，二人が一対(mithuna)によって生類を Varuṇa からときはなつため。MS 1, 10, 11 [151, 10–11], KS 36, 6 [73, 5–6]。

4-2-5-12. 祭主の妻のみが献供を行なうのは，一対ずつ (mithunāt) 生類を Varuṇa の枷よりときはなつため。ŚB 2, 5, 2, 23。

4-2-5-13. 祭火の東側に西面して立ち献供を行なうのは，まずはじめに(purastāt)(?)困窮を祭りによって取り除くため。MS 1, 10, 11 [151, 11–12], KS 36, 6 [73, 6–7]。西面して (pratyaṅ) (?) Varuṇa の枷からときはなたれるため。TB 1, 6, 5, 4–5。

4-2-5-14. karambhapātra の供物が食器 (pātra) の形をしているのは，対をなす二足の家畜 (dvipadaḥ paśavo mithunāḥ＝人間(？)) の困窮をまずはじめに祭によって取り除くため (4-2-6-1 参照)。MS 1, 10, 11 [151, 12–13], KS 36, 6 [73, 7–8]。

4-2-5-15. 本来の祭式，本来の献供の前にこの献供を行なうのは，そうすると Marut 神が祭主の子孫の悪 (pāpman) を奪ってくれる。ŚB 2, 5, 2, 24。

4-2-5-16. この献供の後，「神々に対する義務を果たして家へ帰る」という内容の mantra[14] を唱えるのは，つまり「神々に対する負債を分け前によって取り除き，負債のない者となって家に帰る」と唱えることである。TB 1, 6, 5, 5。彼，祭主を家において安定の中に安定させるためである。ŚB 2, 5, 2, 29。

4-2-5-17. この献供が終わったあとで，その祭火を掃除するのは，「困窮を祭りによ

14) TB の前提としている mantra は TS 1, 8, 3, 1, e: ákran kárma karmakṛtaḥ sahá vācá mayobhuvā́/devébhyaḥ kárma kṛtvástaṃ préta sudānavaḥ//「祭式実行者たちは喜ばしい言葉によって祭式を行なった。神々に祭式を行ない汝らは家へ帰れ，よく与えるものたちよ」。ŚB の前提としているテキストは VS 3, 47。そこでは TS の最後の語 sudānavaḥ が sacābhuvaḥ「仲間たちよ」に置き換えられている。これに対応するテキストを MS 1, 10, 2 [142, 4–5], KS 9, 4 [107, 16–17] も伝えている。

って取り除いたその場所を清めてから諸神格を私は祭ろう」と考えてである。MS 1, 10, 12 [152, 5–7], KS 36, 6 [73, 10–11]。

4-2-6. 大麦の粉で作られた牡羊と牝羊の像 (meṣapratikṛti) に関して。

4-2-6-1. これが牡，牝一対であるのは，対をなす四足の家畜の困窮をあとから取り除くため (4–2–5–14 を参照)。MS 1, 10, 11 [151, 13–15], KS 36, 6 [73, 8–10]。

4-2-6-2. śamī の木の葉と大麦を使うのは，Varuṇa によって捉えられていない二つのものによって，生類を Varuṇa からときはなつため。MS 1, 10, 12 [151, 16–18], KS 36, 6 [73, 11–13]。

4-2-6-3. 大麦を使うのは，Varuṇa 自身の分け前によって生類を Varuṇa からときはなつため。MS 1, 10, 12 [151, 18–19], KS 36, 6 [73, 13–14]。

4-2-6-4. この一対の羊の像は「嘘の家畜」(anṛtapaśu) という言明にもとづき，これを用いるのは，嘘に関して (anṛtād) 生類を Varuṇa よりときはなつため。MS 1, 10, 12 [151, 19–20], KS 36, 6 [73, 14–16]。

4-2-6-5. これが牡，牝一対であるのは，一対の生類を Varuṇa から，または Varuṇa の枷からときはなつため。MS 1, 10, 12 [151, 20], KS 36, 6 [73, 16–17]/TB 1, 6, 4, 4, ŚB 2, 5, 2, 16。

4-2-6-6. この一対の羊の像に毛をはえさせるのは，それを祭式にふさわしいものにするため (medhyatvāya)。MS 1, 10, 12 [152, 1], KS 36, 6 [73, 17–18], TB 1, 6, 4, 4。

4-2-6-7. 羊＝Varuṇa の家畜の等置にもとづいて，これを用いるのは，まのあたりに (pratyakṣam) 生類を Varuṇa の枷よりときはなつため。ŚB 2, 5, 2, 16。

4-2-7. 牡の羊の像を Varuṇa に対する凝乳の中に置き，牝の羊の像を Marut に対する凝乳の中に置き，その中に śamī の木の葉を大量にいれることに関して。

4-2-7-1. 安寧 (śaṃtva/śam) のため。MS 1, 10, 12 [152, 2], KS 36, 6 [73, 18–19]/ŚB 2, 5, 2, 12。

4-2-7-2. 一対の羊に飼葉を与えるため。TB 1, 6, 4, 5。

4-2-7-3. 食物 (annādya) を得るため。MS 1, 10, 12 [152, 2–4], KS 36, 6 [73, 19–74, 1], TB 1, 6, 4, 5。

4-2-7-4. すべての困窮を祭りによって取り除くため。MS 1, 10, 12 [152, 4–5], KS 36, 6 [74, 1–2]。

4-2-8. Varuṇa と Marut に対する凝乳の中に karīra の実をいれることに関して。

4-2-8-1. Indra が Yati 達を Śālavṛkeya に餌食として与えたというエピソードが語られ，それにもとづき，karīra の実を用いるのは，雨と食物を得るためとされる。MS 1, 10, 12 [152, 7–11]。TB 1, 6, 4, 5 によると，このエピソードはなく，karīra＝soma 的の等置にもとづき，雨を得るためとされる。

4-2-8-2. KS 36, 7 [74, 5–11] は MS と同じエピソードを語り，それにもとづき，soma の飲物を得るとする。

4-2-8-3. かつて山には翼があり，その翼を Indra が切ると，それが雲となり山のまわりをただようというエピソードが語られ，それにもとづき，karīra の実を用いるのは，雨を継続させるためとする。MS 1, 10, 13 [152, 12–18], KS 36, 7 [74, 5–11]。

4-2-8-4. 生類に平安 (kam) をなすため。ŚB 2, 5, 2, 11。

4-2-9. この祭式において uttaravedi を作るのは，生まれた生類を受け取る (pratigṛh-) ため。MS 1, 10, 13 [152, 18–19], KS 36, 7 [74, 11–12]。

4-2-10. この祭式において Adhvaryu 祭官のためと，Pratiprasthātṛ 祭官とのために，それぞれ北と南に二つの vedi が作られる。その二つの vedi に関して。

4-2-10-1. 北の vedi＝食べる主体としての生類 (atri- prajā) の母胎 (yoni)，南の vedi＝食べられる対象としての生類 (adya- prajā) の母胎という等置にもとづいて，この二種類の生類[15]を次々に生んでいくため。MS 1, 10, 13 [152, 19–153, 2], KS 36, 7 [74, 12–14]。

4-2-10-2. 両方のところで生類を Varuṇa の枷よりときはなつため。ŚB 2, 5, 2, 5。

4-2-10-3. 二つの vedi が互いに離れているのは，すべての困窮を祭りによって取り除くため。MS 1, 10, 13 [153, 5], KS 36, 7 [74, 17–18]。

4-2-10-4. 西側のところで一本の線を引き，二つの vedi を結ぶのは，継続 (anusaṃtati) のため。MS 1, 10, 13 [153, 6–7], KS 36, 7 [74, 18–19]。

4-2-10-5. 北の vedi に uttaravedi を作るのは，後から登らせないため（？）[16]。MS 1, 10, 13 [153, 6–7], KS 36, 7 [74, 18–19]。TB 1, 6, 4, 3 によると家畜を得るため。ŚB 2, 5, 2, 6 によると王族 (kṣatra) を庶民 (viś) より上にするた

15) 食べる主体としての生類と食べられる対象としての生類に関して [Rau 1957: 32] を参照。

16) MS 1, 10, 13 [153, 6-7] のテキストは以下のごとし úpemáṃ vápati némám anvabhyárohayat。[Caland 1918: 7] はこれに対応する KS 36, 7 [74, 18] によって次のような読みの訂正を提案している：upemām vapati nemam, ananvabhyārohāya。この ananvabhyārohāya つまり「後から登ってこないために」が意味するところは，4-2-10-1 で話題になった，南の vedi を母体とする被支配者たる食べられる対象としての生類が北の vedi を母胎とする支配者たる食べる主体としての生類のもとに登ってこないように，すなわち社会秩序が維持されるようにということであろう。

め。

4-2-10-6. 北の vedi では Adhvaryu 祭官が，南の vedi では Pratiprasthātṛ 祭官が別々に祭式行為を行なうのは，被支配者と支配者 (pāpavasīya) を区別するため。MS 1, 10, 13 [153, 7–8], KS 36, 7 [74, 19–75, 1]。

4-2-10-7. しかし，基本的には Adhvaryu 祭官が行なうことを Pratiprasthātṛ 祭官も行なうのは，王族に対して庶民を模倣者，追随者にするため。ŚB 2, 5, 2, 34。

4-2-11. 今まで牡羊の像は Marut に対する凝乳の中にあり，牝羊の像は Varuṇa に対する凝乳の中にあったが，その二つを置き換えるのは，王族の中に勇気 (vīrya) をおき，庶民を勇気のない状態にするため。ŚB 2, 5, 2, 36。

4-2-12. Marut に対する凝乳，ついで Varuṇa に対する凝乳の順序で献供するのは，虚偽 (anṛta) をまず祭りによって取り除き，最後に Varuṇa を祭りによって宥めるため。TB 1, 6, 5, 1。

4-2-13. prayāja と anuyāja の数が九つであるのは，Varuṇa の枷より生類をときはなつため。ŚB 2, 5, 2, 41。

4-2-14. 祭式の報酬 (dakṣiṇā) は一対の牛であるのは，それが誕生 (prajāti) の形 (rūpa) であるから。KB 5, 4 [19, 23] (5, 5, 11–12), GB 2, 1, 22 [159, 8–9]。

4-2-15. 一連の献供が行なわれた後，祭場を離れ川に行き，沐浴 (avabhṛtha) が行なわれるが，その沐浴に関して。

4-2-15-1. 沐浴を行なうのは，祭主を Varuṇa との関係から断つため (nirvaruṇatva)。MS 1, 10, 13 [153, 11–12]。または，自分自身の困窮を祭りによって取り除くため。KS 36, 7 [75, 5]。

4-2-15-2. Varuṇa に対する凝乳の残り滓 (niṣkāsa) を用いるのは，Varuṇa と深く結び付いているもの (varuṇasya nyakta) を分け前として与えて宥めるため。MS 1, 10, 13 [153, 12–14], KS 36, 7 [75, 5–8]。Varuṇa によって捉えられたものによって Varuṇa を祭り宥めるため。TB 1, 6, 5, 5, (KS 36, 7 [75, 5–7)。Varuṇa との関係を断つため。ŚB 2, 5, 2, 46。

4-2-15-3. 水の中にその残り滓を献じるのは，まのあたりに祭りによって Varuṇa を宥めるため。TB 1, 6, 5, 5–6。Varuṇa を自分自身の拠所 (āyatana) において満足させるため。KB 5, 4 [19, 24–20, 1] (5, 5, 23–24), GB 2, 1, 22 [159, 9–10]。

4-2-15-4. Varuṇa の枷は退けられたという内容の mantra[17] を唱えるのは，

17) TB が前提とする mantra TS 1, 4, 45, i: prátiyuto váruṇasya páśaḥ prátyasto váruṇasya páśaḥ「Varuṇa の枷は妨げられた。Varuṇa の枷はなげやられた。」

Varuṇa の枷から解き放たれるため。TB 1, 6, 5, 6。

4-2-15-5. 沐浴の後，新しい衣服に着替えるのは，蛇が古い皮から離れるように，すべての悪 (pāpman) から離れるため。ŚB 2, 5, 2, 47。

4-2-15-6. 後ろを振り向かないでもとの祭場に帰ってくるのは，Varuṇa が後からついてこないようにするため。MS 1, 10, 13 [153, 14], KS 36, 7 [75, 8], TB 1, 6, 5, 6。

4-2-15-7. 帰路，家畜小屋より遠くのところで (parogoṣṭham) からだを洗うのは，家畜小屋より遠くのところで Varuṇa に分け前を与えて宥めるためである。MS 1, 10, 13 [153, 14]。

4-2-16. もとの祭場に帰ってから，祭火を礼拝するが，それに関して。

4-2-16-1. 「汝は薪なり。願わくば，我々の栄えんことを」と，唱えるのは，Varuṇa との関係を断って，繁栄 (edhatu/edhitu) に赴くため。MS 1, 10, 13 [153, 15–16], KS 36, 7 [75, 8–9]。または，薪を用いて火の神 Agni を敬いつつ，その神に近づくため。TB 1, 6, 5, 6。

4-2-16-2. 「汝は薪なり。願わくば，我々のともに栄えんことを」と，唱えるのは，火を燃え立たせるため (samiddhi) MS 1, 10, 13 [153, 16–17], または，願望を表明するため。KS 36, 7 [75, 9–10]。

4-2-16-3. 「汝は光輝 (tejas) なり。光輝を我に置け」と，唱えるのは，光輝を自分自身の中に置くため。KS 36, 7 [75, 10–11], TB 1, 6, 5, 6。

4-2-17. 最後に満月祭を行なうのは，整った祭式によって，最後に安定するため。ŚB 2, 5, 2, 48。

B. まとめ

Vaiśvadeva 祭の場合と同様に，Varuṇapraghāsa 祭の個々の祭式行為に対する解釈のうち，この祭式の機能または効果の説明に該当する六十七個の項目を要約してみた。Varuṇapraghāsa 祭に対しては，既に 2–2–2 では生類を Varuṇa に捉えさせる (MS, KS)，または生類を Varuṇa の枷より解放する (TB, ŚB) とされ，3–3 では困窮 (aṁhas) をこの祭式によって取り除く (MS, KS)，または生類を Varuṇa の枷より解放する (TB, ŚB, KB, GB)，更には Āditya の世界を獲得する (TB 1, 4) などと解釈されていた。この全般的な解釈と，個々の祭式行為に対する解釈との関係を明確にするために，再び上の六十七項目を次のようにグループ分けしてみる。

1. Varuṇa と関連する項目には次のものがある。

Varuṇa を分け前によって宥める (nir-ava-dā-, niravatti-)：4–2–5–5 (MS, KS),

4–2–15–2 (MS, KS), 4–2–15–7 (MS)。[三項目]

Varuṇa を祭りによって宥める (ava-yaj-): 4–2–5–8 (TB), 4–2–5–10 (TB), 4–2–12 (TB), 4–2–15–2 (TB), 4–2–15–3 (TB)。[五項目]

生類を Varuṇa より解放する (muc-): 4–2–3–3 (MS, KS), 4–2–5–3 (MS, KS), 4–2–5–11 (MS, KS), 4–2–6–2 (MS, KS), 4–2–6–3 (MS, KS), 4–2–6–4 (MS, KS), 4–2–6–5 (MS, KS)。[七項目]

生類を Varuṇa の枷 (varuṇapāśa) より解放する (TB: muc-, ŚB: pra-muc-): 4–2–2–1 (ŚB), 4–2–2–3 (ŚB), 4–2–5–4 (TB, ŚB), 4–2–5–5 (TB, ŚB), 4–2–5–12 (ŚB), 4–2–5–13 (TB: nirmucyate), 4–2–6–5 (TB, ŚB), 4–2–6–7 (ŚB), 4–2–10–2 (ŚB), 4–2–13 (ŚB), 4–2–15–4 (TB: nirmucyate)。[十一項目]

Varuṇa との関係を断った状態 (nirvaruṇatva) のため：4–2–2–3 (MS, KS), 4–2–15–1 (MS), 4–2–15–2 (ŚB)。[三項目]

Varuṇa がついてこないため：4–2–15–6 (MS, KS, TB)。[一項目]

Varuṇa を満足させる：4–2–15–3 (KB, GB)。[一項目]

このグループに更に，祭主の妻が嘘の告白をすると，最もいとしいものに災いが生じる：4–2–4–2 (MS, KS, TB, ŚB)，祭主の妻の恋人を Varuṇa の枷に捉えさせる：4–2–4–4 (TB)，敵対者を Varuṇa の枷に捉えさせる：4–2–5–9 (TB) という三項目も加えていいと思う。

2. Varuṇa 同様，生類に悪しきことを行なう Marut に対する項目としては次のものがある。

Marut を分け前で宥める，または静める：4–2–2–2 (MS, KS/ŚB)。[一項目]

3. Varuṇa や Marut という恐ろしい面をもつ神々との関係を断つことは，更に次のように表現される。

困窮 (aṁhas) を祭式によって取り除く (ava-yaj-, avesṭi): 4–2–5–1 (MS, KS), 4–2–5–4 (MS, KS), 4–2–5–13 (MS, KS), 4–2–5–14 (MS, KS), 4–2–6–1 (MS, KS), 4–2–7–4 (MS, KS), 4–2–10–3 (MS, KS), 4–2–15–1 (KS)。これに更に 4–2–5–17 (MS, KS) と 4–2–5–2 (MS, KS) も加える。[十項目]

悪しき状態 (pāpman) から離れる：4–2–15–5 (ŚB)。[一項目]

Marut が生類の悪 (pāpman) を奪う：4–2–5–15 (ŚB)。[一項目]

罪 (enas) からの解放： 4–2–5–8 (ŚB)。[一項目]

4. Varuṇa や Marut というおそろしい神々の影響を排除し，困窮などの悪しき状態から離れると，積極的に良い状態を得ることとなる。

平安な状態 (kantva) または平安 (kam) または幸福 (sukha) を得る：4–2–3–1 (MS, KS, TB/ŚB/KB, GB)。平安を得る：4–2–8–4 (ŚB)。[二項目]

安寧な状態 (śaṃtva) または安寧 (śam) を得る：4–2–7–1 (MS, KS/ŚB)。[一項目]

虚偽 (anṛta) から離れ，天則 (ṛta)，真実 (satya) に至る：4–2–4–1 (MS, KS)。[一項目]

負債 (ṛṇa) を払い，負債のないもの (anṛṇa) となる：4–2–5–16 (TB)。[一項目]

5.　そのような状態の祭主はいろいろな力を得る。

呼気 (prāṇa) と吸気 (apāna) を得る：4–2–1–3 (MS, KS/TB/ŚB)。[一項目]

いろいろな力 (ojas, vīrya: MS, KS; ojas, bala: TB; bala, tejas: GB) を得る：4–2–1–2 (MS, KS/TB/GB)。[一項目]

祭主に勇気 (vīrya) を置く：4–2–5–6 (TB)。[一項目]

勇気を持った状態 (savīryatva) を実現：4–2–5–7 (TB)。[一項目]

光輝 (tejas)を自分の中に置く：4–2–16–3 (KS, TB)。[一項目]

6.　恐ろしい神 Varuṇa はまた雨を支配する神でもある。雨季の初めにその神を宥めて雨を得る。

雨の獲得：4–2–8–1 (MS, TB)。[一項目]

雨の継続：4–2–8–3 (MS, KS)。[一項目]

7.　その結果，家畜や食料を得て，安定し繁栄する。

家畜の獲得：4–2–10–5 (TB)。[一項目]

一対の羊に飼葉を与える：4–2–7–2 (TB)。[一項目]

食料 (annādya) の獲得：4–2–7–3 (MS, KS, TB)。[一項目]

安定する：4–2–1–4 (KB), 4–2–5–16 (ŚB), 4–2–17 (ŚB)。[三項目]

繁栄する：4–2–16–1 (MS, KS), 4–2–16–2 (KS)。[二項目]

8.　恐ろしい神 Varuṇa はまた司法の神であり，彼を祭ることによって社会の秩序を維持する。

支配者と被支配者の秩序を維持する：4–2–10–1 (MS, KS), 4–2–10–5 (MS, KS/ŚB), 4–2–10–6 (MS, KS), 4–2–10–7 (ŚB), 4–2–11 (ŚB)。[五項目]

9.　そして残る十項目は次のような内容である。神々に関しては，一切神にかなうため：4–2–1–1 (KS), Prajāpati を満足させるまたは得る：4–2–3–2 (KB/GB), 敬いつつ Agni に近づく：4–2–16–1 (TB)。祭式に関しては soma の飲物 (somapītha) を得る：4–2–8–2 (KS), 祭主の妻を祭式にかなうもの (medhya-) にし：4–2–4–3 (MS, KS, TB), 一対の羊の像を祭式にかなうものにし：4–2–6–6 (MS, KS, TB),

祭火を燃え立たせる：4–2–16–2。そして生類をしっかりと摑み (prati-gṛh-)：4–2–9 (MS, KS)，誕生 (prajāti) の形を実現し：4–2–14 (KB, GB)，子孫の継続をはかる：4–2–10–4 (MS, KS)。

Varuṇapraghāsa 祭の個々の祭式行為に対する解釈のうち，この祭式の機能または効果の説明に該当する六十七項目から五十七項目を八つのグループにわけてみた。そのグループわけから次のことを Varuṇapraghāsa 祭に想定された機能と考える。つまりこの祭式によって Varuṇa を宥め，満足させ，Varuṇa または Varuṇa の枷より生類を解放し，Varuṇa との関係を断つ。それは困窮 (aṁhas) や悪しき状態 (pāpman) を取り除くことであり，その結果，平安な状態 (kantva) または平安 (kam)，あるいは安寧な状態 (śaṃtva) または安寧 (śam) を得，祭主自身はいろいろな力を得る。雨を支配する神でもある Varuṇa は祭りにより宥められ，雨季に適切な雨を与え，家畜や食料を確保させる。更に，司法を司どる神でもある Varuṇa を祭ることによって社会の秩序が維持される。

このように個々の祭式行為に対する解釈より Varuṇapraghāsa 祭の機能を抽出してみると，その結果は大筋において 2–2–2 や 3–3 で与えられた Varuṇapraghāsa 祭の解釈と対応しているということ，また全体的な解釈において Vaiśvadeva 祭の解釈と Varuṇapraghāsa 祭の解釈は異なっていたが，個々の点においてもその関心の力点が明瞭に異なっているということが指摘される。

4-3. Sākamedha 祭の個々の祭式規定に関して

A. 分　析

4-3-1. Agni anīkavat に対する八皿の puroḍāśa について。

4-3-1-1. 「Agni を前衛 (anīka) として彼 (Indra) は Vṛtra を殺した」という短い神話的主張にもとづき「前衛とするため (anīkatvāya)」とする。MS 1, 10, 14 [154, 2], KS 36, 8 [75, 16–17]。ŚB 2, 5, 3, 2 は「Vṛtra を殺そうとする神々は Agni を前衛として向かって行った。Agni は光輝 (tejas) として動揺しなかった」と言い，それを更に「悪しき憎むべき敵対者を殺そうとする者は Agni を前衛として向かって行く。Agni は光輝として動揺しない」と，現実世界と結びつける。

4-3-1-2. Agni＝神々の将軍 (senānī) という等置にもとづき，出陣のためのものという。MS 1, 10, 14 [154, 2–3], KS 36, 8 [75, 17–18]。

4-3-1-3. TB 1, 6, 6, 1–2 は，「Asura 達と戦っている神々は Agni anīkavat に対してこの献供を行ない，満足した Agni は四種の前衛を作りだし，その結果神々

は栄えた」という神話的エピソードを語り，それにもとづき「この献供に満足した Agni は四種の前衛を作りだす」とする。

4-3-1-4. Agni＝神々の顔 (mukha) の等置にもとづき，まずはじめに (mukhatas) 神々を満足させるとする。KB 5, 5 [20, 5–6] (5, 6, 6–8), GB 2, 1, 23 [159, 16–160, 2]。

4-3-1-5. 日の出と同時にこの供物の材料の米を荷車から取りだすのは，まのあたりに彼（祭主）のために前衛を作りだすため。TB 1, 6, 6, 2。

4-3-2. Marut sāṃtapana に対する caru に関して[18]。

4-3-2-1. 「敗北した Asura 達は天と地によりかかっていたのを，神々はこの献供によって両方のところで苦しめた」というエピソードにもとづき「祭主は天地両方のところで敵対者を苦しめる」とする。TB 1, 6, 6, 2–3。

4-3-2-2. この供物が米粥 (caru) であるのは，あらゆるところで敵対者を苦しめるため。TB 1, 6, 6, 3。

4-3-2-3. 「Marut sāṃtapana は真昼に Vṛtra を苦しめ，苦しめられた Vṛtra は息をするだけで，ぐったりしていた」というエピソードにもとづき，「悪しき憎むべき敵対者を苦しめる」とする。ŚB 2, 5, 3, 3。

4-3-3. Marut gṛhamedha に対する caru に関して[19]。

4-3-3-1. 「Asura 達と対峙している神々は，翌日の勝利を期して米粥を料理したが，供物以外は食べない神々はこれを Marut gṛhamedha に献じた後食べ，そのため神々は栄え，Asura 達は滅びた」というエピソードにもとづき，この献供により祭主自らは栄え，彼の敵対者は滅びるとする。TB 1, 6, 6, 3–5。

4-3-3-2. 「翌朝 Vṛtra を殺そうとする神々は栄養 (medhas[20]) を摂取した」というエピソードにもとづいて，悪しき憎むべき敵対者を殺そうとする者が，栄養を摂取する。ŚB 2, 5, 3, 4。

4-3-3-3. この供物が乳で炊いた米粥であるのは，乳＝栄養 (medha)，玄米 (taṇḍula)＝栄養という等置にもとづいて，二種の栄養を自らに摂取するとする。ŚB 2, 5,

18) MS 1, 10, 14 [153, 20–154, 2]; KS 36, 8 [75, 12-16] および MS 1, 10, 14 [154, 3–5]; KS 36, 8 [75, 21–76, 2] に (Marut) sāṃtapana の語源解釈の二つのエピソードが語られている。しかし，それらのエピソードにはこの Marut sāṃtapana への献供の効果に関する言及がないのでここでは触れない。なおこれらのエピソードに関しては [Hoffmann 1975: 210–211] を参照。

19) MS 1, 10, 15 [154, 9–12]; KS 36, 9 [76, 3–6] および MS 1, 10, 15 [154, 12–16]; KS 36, 9 [76, 6–9] に神々と Asura 達との争いに関連して Marut gṛhamedha のエピソードが語られている。これらのエピソードに関しては [Hoffmann 1975: 211–212]を参照。

20) ŚB 2, 5, 3, 4 の medhas は [Eggeling 1972: 410] によると medha「栄養」と同じ意味を持つ。

3, 4。

4-3-3-4. 「神々と Asura 達が争っているとき，Asura 達は神々のもとに飢えを送った。そのもの音を聞いてこの米粥を料理したため，飢えは神々のもとでいく場所 (loka) がみつからず，Asura 達のもとに帰り，そのため神々は栄え，Asura 達は滅びた」というエピソードにもとづき，このエピソードを知って米粥を炊くものは栄え，彼の敵対者は滅びるとする。MS 1, 10, 15 [154, 16–155, 1][21]。

4-3-3-5. 更に余分の (prativeśa) 米粥を炊く (MS)，または近所でも (prativeśe) 米粥を炊くのは (KS)，飢えを敵対者に送ることとなる。MS 1, 10, 15 [155, 12], KS 36, 9 [76, 11–12]。

4-3-3-6. この余分な米粥 (prativeśa odana) に関して TB 1, 6, 7, 1 は次のように言う。もし祭主の妻が本来の米粥から食べると，彼女は家庭祭を行なう者 (gṛhamedhī) になるが，その祭式自身がだめになる。もし彼女が食べないと，彼女は家庭祭を行なわない者 (agṛhamedhī) になり，しかし祭式自身はだめにならない。従って，余分な米粥を炊いてそれから祭主の妻が食べると，彼女は家庭祭を行なうものとなり，祭式もだめにならない。

4-3-3-7. この献供において，prayāja と anuyāja を行なわず sāmidhenī の祭歌を唱えず，二つの ājyabhāga 献供を行なわないのは，祭式を実現するため。MS 1, 10, 15 [155, 2–4], KS 36, 9 [76, 12–14]。

4-3-3-8. TB 1, 6, 6, 5–6 によるとこの献供でわざわざ祭場に敷く草と薪を準備せず，sāmidhenī の祭歌を唱えず，prayāja と anuyāja を行なわないということを知るものは，家畜に富むものとなるという。

4-3-3-9. TB 1, 6, 6, 6 によると，二つの ājyabhāga 献供は行なわれ，それは祭式の二つの目を排除しないためとされ，KB 5, 5 [20, 10–11] (5, 6, 16–19) によると，祭主を栄えさせるという。

4-3-3-10. この献供で Agni sviṣṭakṛt 献供を行なうのは，祭式の完成 (samiṣṭi) と安定 (pratiṣṭhiti) のため，または安定のため。MS 1, 10, 15 [155, 4–5], KS 36, 9 [76, 14–15]/TB 1, 6, 6, 6。

4-3-3-11. iḍā 献供でもってこの献供祭を終了させるのは，iḍā＝家畜の等置にもとづいて，最後に家畜の中に安定するためだとする。TB 1, 6, 6, 6。

4-3-3-12. この米粥の料理容器の底にこびりついているものをかきだしたもの (niṣkāsa) を，翌朝の pūrṇadarvya 献供の供物としてとっておくのは，祭式の継続

21) KS 36, 9 [76, 9–11] はこの MS と同じエピソードを伝えるが，効果に関する言及を欠いている。

のため。MS 1, 10, 15 [155, 6], KS 36, 9 [76, 16]。TB 1, 6, 7, 3 によると，分け前をとっておいてもらっている Indra が祭主のもとにやって来るためという。

4-3-4. この夜の宴会に関して。

4-3-4-1. 仔牛と共に母牛が夜を過ごすのは，Sākamedha（全員参加の祭式）が実現するため。MS 1, 10, 16 [155, 10], KS 36, 10 [76, 21]。または家畜が栄養 (medha) を摂取するため。ŚB 2, 5, 3, 16。

4-3-4-2. 女も食事に参加するのは，Sākamedha が実現するため。MS 1, 10, 16 [155, 10–12], KS 36, 10 [76, 21–22]。

4-3-4-3. 全員十分に食べ，アイシャドーをつけ，からだに香油を塗り，仔牛を母牛と一緒にして一夜を送らせるのは，敵対者に対して祭主が飢えを送りこむため。TB 1, 6, 7, 2–3。

4-3-5. pūrṇadarvya 献供に関して。

4-3-5-1. 前日の祭式と翌朝の祭式を結び付けるため。KB 5, 5 [20, 11–12] (5, 6, 20–21), GB 2, 1, 23 [160, 6–8]。

4-3-5-2. 牡牛に呼びかけるのは，Indra に呼びかけること (MS, KS)，または Vṛtra を殺すために Indra に呼びかけること (ŚB) であり，敵対者の繁栄 (puṣṭi) を奪ったり (KS)，敵対者の体力 (indriya) と勇気 (vīrya) を奪ったりする (TB) ためであり，あるいは，「我々に次々と子孫が生まれるようにせよ」と思って Asura たちの牡牛を呼びよせる (MS, KS) ことでもある。MS 1, 10, 16 [155, 7–10], KS 36, 9 [76, 17–20], TB 1, 6, 7, 4, ŚB 2, 5, 3, 18。

4-3-5-3. 家庭用の木製の料理匙 (darvī) で献供することは，darvī は災をもたらす女神 Nirṛti に摑まれたものという主張にもとづいて，Nirṛti に摑まれたものによって Nirṛti を遠ざけるとする。MS 1, 10, 16 [155, 12–15], KS 36, 10 [76, 22–74, 4]。

4-3-5-4. gārhapatya 祭火に献供するのは，祭主に分け前 (bhāgadheya) を十分に与えるため。TB 1, 6, 7, 3–4。

4-3-6. Marut krīḍin に対する献供に関して[22]。

4-3-6-1. 神々と Asura 達の戦い，あるいは Indra の Vṛtra 殺しのエピソードにもとづいて，この献供を行なうのは勝利 (jiti/vijiti) のためという。MS 1, 10, 16

22) MS 1, 10, 16 [155, 15–16]; KS 36, 10 [77, 4–6] および MS 1, 10, 16 [155, 20–156, 1]; KS 36, 10 [77, 10] に (Marut) krīḍin に関するエピソードが伝えられている。それらに関して [Hoffmann 1975: 212] を参照。

[155, 16–19], KS 36, 10 [77, 6–8]/TB 1, 6, 7, 4–5。

4-3-6-2. Vṛtra を殺そうとしてやって来た Indra のまわりで Marut krīḍin は Indra を元気づけるために戯れたというエピソードにもとづいて，悪しき憎むべき敵対者を殺そうとする祭主を元気づけるためにまわりで戯れるとする。ŚB 2, 5, 3, 20。

4-3-6-3. 朝の太陽の光と同時に献供を行なうのは，勝利のため。MS 1, 10, 16 [155, 19–20], KS 36, 10 [77, 8–9]。

4-3-6-4. 日の出と同時に献供を行なうのは，栄えるため (samṛdhyai)。TB 1, 6, 7, 5。

4-3-7. Indra-Agni に対する十一皿の puroḍāśa に関して[23]。

4-3-8. Indra に対する米粥 (caru) に関して。

Indra は Vṛtra を殺して，戦利品の一番よいところを最初に取ったというエピソードを語り (MS, KS, TB)，それゆえ王は戦いに勝ったのち，戦利品の一番よいところを取る (MS)，または，祭主が他の仲間のうちで戦利品の一番よいところをとる (TB) とする。MS 1, 10, 16 [156, 3–5], KS 36, 10 [77, 12–13], TB 1, 6, 7, 5。

4-3-9. 偉大なる Indra (Mahendra) に対する caru に関して。

Indra は Vṛtra を殺して Mahendra になったというエピソードにもとづき，Vṛtra を殺すために彼 (Indra) を大いなるもの (mahān) にするという。ŚB 2, 5, 4, 9。

4-3-10. Viśvakarman に対する一皿の puroḍāśa に関して。

一切の行為 (viśvāni karmāṇi) が成就することを願って (MS, KS)，または祭主が一切の行為を得るため (TB)，または一切の行為が成就し，Sākamedha を行なって得るであろうすべてのものを勝ち取るため (ŚB)。KB, GB によると，太陽＝Viśvakarman の等置にもとづき，太陽を満足させるため。MS 1, 10, 16

23) MS 1, 10, 16 [156, 2–3]; KS 36, 10 [77, 11–12] また ŚB 2, 5, 4, 8 に Indra-Agni 両神に関する短いエピソードがある。

24) MS と KS がここの解釈に対して前提としている mantra は次のものである。MS 1, 10, 2 [141, 7–9] ágne vér hotráṃ vér dūtyàm ūrdhvó adhvaró asthād ávatāṃ no dyā́vāpṛthivī́ sviṣṭakṛ́d índrāya devébhyo bhavāsyá ghṛtásya havíṣo juṣāṇó vīhi svā́hā [Agni よ，Hotṛ の職務を引受けよ。使者の職務を引受けよ。高く祭式は立っている。天と地は我々を助けよ。Indra に対して，神々に対して正しい祭式の完成者たれ。バターの供物を喜んで受けよ，svāhā」。KS 9, 5 [108, 8–11] ágne vér hotráṃ vér dūtyàm ūrdhvò 'dhvaré 'sthā ávatāṃ tvā dyā́vāpṛthivī́ áva tváṃ dyā́vāpṛthivī́ sviṣṭakṛ́d índrāya devébhyo bhava juṣāṇó asyá havíṣo ghṛtásya vīhi svā́hā「……汝は祭式において高く立っている。天と地は汝を助けよ。汝は天と地を助けよ。……」。

[156, 5–6], KS 36, 10 [77, 13–14], TB 1, 6, 7, 5, ŚB 2, 5, 4, 10, KB 5, 5 [20, 18–19] (5, 7, 14–16), GB 2, 1, 23 [160, 16–161, 2]。

4-3-11. 「Agni よ，Hotṛ の職務を引受けよ」という mantra[24] を唱えて二度目の āghāra 献供を行なうことに関して。各献供を継続させ，三十の献供を実現するため。MS 1, 10, 16 [156, 6–7], KS 36, 10 [77, 14–15]。

4-3-12. 十二の献供[25] に関して。

4-3-12-1. 生類を創り，困窮を祭りによって取り除き，Vṛtra を殺した神々は不死性 (amṛtatva) を願ったといい，不死性＝天界，天界＝十二カ月からなる一年の等置にもとづき，十二の献供を行なうのは，それによって不死性に触れるためという。MS 1, 10, 17 [156, 8–10], KS 36, 11 [77, 16–18]。

4-3-12-2. 年に達したが，年を越えて行ってしまったので，この十二の献供で再び取り戻すとする。MS 1, 10, 17 [156, 10–12], KS 36, 11 [78, 1–2]。

4-3-12-3. この十二の献供を六個ずつに分けて行なうと[26] いうことに関して。季節は六つという主張にもとづき，これら六つの季節を一年にはいらせ，それらに続いて祭主も一年にはいっていくとする。MS 1, 10, 17 [156, 12–14], KS 36, 11 [77, 19–78, 1]。

4-3-12-4. これと同じことに関して，更に，季節＝祖霊の等置にもとづき，祖霊を生みだし（？），それに従って，祭主の子孫も次々と生まれていくとする。MS 1, 10, 17 [156, 14–15], KS 36, 11 [78, 2–3]。

4-3-13. 九つの prayāja，九つの anuyāja，八つの献供，Agni sviṣṭakṛt に対する献供を九番目に行なうのは，星宿 (nakṣatra) 的 virāj を得るため。KB 5, 5 [20, 15–16] (5, 7, 9–10) (4–1–14 を参照)。

4-3-14. 祖霊祭における Soma pitṛmat に対する六皿の puroḍāśa に関して。

4-3-14-1. 祭神が Soma pitṛmat であるのは，Soma pitṛmat＝一年の等置にもとづいて，一年を満足させるとする。TB 1, 6, 8, 2–3。

4-3-14-2. 供物が六皿であるのは，季節は六つという主張にもとづいて，季節が祭

---

25) 十二の献供とは次のものである。つまり Sākamedha 祭第一日の早朝に行なわれる Agni anikavat への八皿の puroḍāśa の献供，正午の Marut sāṃtapana への caru の献供，夕方の Marut gṛhamedha への caru の献供，二日目早朝の Marut kriḍin への七皿の puroḍāśa, Cāturmāsya 祭全体に共通する五つの供物の献供，そして Indra-Agni への十一皿の puroḍāśa, Indra への caru，十二番目が Viśvakarman への一皿の puroḍāśa である（1004頁を参照）。

26) MS 1, 10, 17 [156, 12]＝KS 36, 11 [77, 19] yát ṣáṭ-ṣaṭ saṃpādáyati「六ずつにするのは」。献供は十二個あるが，それらは Sākamedha 祭第一日目に三個行なわれ，二日目は早朝の一つと Mahāhavis の八個というように分配されているので，「六ずつにする」とは，具体的に何を指すのかは不明。

られ満足するとする。MS 1, 10, 17 [157, 1–2], KS 36, 11 [78, 8–9]。

4-3-14-3. 供物が puroḍāśa であることによって祭式が実現するとされる。MS 1, 10, 17 [157, 2–3], KS 36, 11 [78, 8–9]。

4-3-15. Pitṛ barhiṣad に対する dhānā に関して。

4-3-15-1. 祭神が Pitṛ barhiṣad であるのは，Pitṛ barhiṣad と等置される月々を満足させ，更にひとが死んだその季節があの世で栄えることとなるとされる。TB 1, 6, 8, 3。

4-3-15-2. 供物が炊り米 (dhānā) [永ノ尾　1984b: 528] であることによって，無数にある一年の夜が祭られ，満足させられるとする。MS 1, 10, 17 [157, 3–4], KS 36, 11 [78, 9–11]。

4-3-16. Pitṛ agniṣvātta に対する炒り米の粉をねったもの (mantha) [永ノ尾 1984b: 529] に関して。

4-3-16-1. 祭神が Pitṛ agniṣvātta であるのは，Pitṛ agniṣvātta と等置される半月を満足させるためとする。TB 1, 6, 8, 3–4。

4-3-16-2. 供物が mantha であることによって，祖霊祭が実現するとされる。MS 1, 10, 17 [157, 5], KS 36, 11 [78, 11–12]。

4-3-17. 祖霊祭の薪が神々に対する祭式の薪より大きいのは，祖霊祭と神々に対する祭式を区別するため。TB 1, 6, 8, 6。

4-3-18. 祭場に敷くチガヤが根付きであるのは，祖霊祭と神々に対する祭式を区別するため。TB 1, 6, 8, 6–7。

4-3-19. 時計回りに三回まわりながら祭場にすっかりチガヤを敷き，次にチガヤを敷くことなく逆回りに三回まわりを歩くことに関して。

4-3-19-1. 三回敷きながらまわるのは，「すべての方角からわたしのところに祖霊達が来てくれるように」と願ってである。MS 1, 10, 17 [157, 12–14]。またはそうすることによって祖霊達を満足させるため。TB 1, 6, 8, 7–8。

4-3-19-2. 逆回りに三回まわることに関して，「祖霊祭で歩き回るものはこの世界より出ていく」[27] という主張にもとづいて，逆回りすることによってこの世界に戻ってくるとする。KS 36, 12 [78, 20–22]。TB 1, 6, 8, 8 によると，時計回りに三回，逆回りに三回，合計六が実現し，季節は六つという主張にもとづき，季

27) KS 36, 12 [78, 20–21] eti vā eṣo 'smāl lokād yaḥ pitṛyajñaṃ paryeti をこのまま解釈すると，pitṛyajñam が対格であるので「祖霊祭のまわりをまわる者はこの世界より出ていく」となる。pitṛyajñam を位格 pitṛyajñe に読み替えるとより文意が鮮明になると思われるので，この読み替えを今提案する。

節を満足させるとする。

4-3-20. prastara (vedi の上に置かれる一本のチガヤでその上に祭匙が置かれる) に関して。

TB 1, 6, 8, 8 によると，神々に対する祭式のときのように祭文を唱えて prastara をチガヤの束から取りだすと，祭主が早死してしまい，取りださないと，祭主が拠所をもたないもの (anāyatana) になってしまうといい，従ってこの祖霊祭で prastara を黙って祭場に置くと，祭主が早死することもなく，また，拠所を失うこともないという。

4-3-21. paridhi (āhavanīya 祭火のまわりに置かれる木の棒)，に関して。

TB 1, 6, 8, 8–9 によると，神々に対する祭式のときのように三本の paridhi を祭火のまわりに置くと，祭主を死によって囲うことになり，paridhi を置かないと，Rakṣas 達が祭式を壊すこととなる。従ってこの祖霊祭で二本の paridhi を置くのは，Rakṣas 達を追い払うためであり，祭主を死から放すためであるとする。

4-3-22. 二つの āghāra 献供に関して。

これを行なうのは，祭式と人間のあいだを塞がないため。TB 1, 6, 9, 1。

4-3-32. pravara (Hotṛ 祭官の儀礼的選抜) に関して。

Hotṛ 祭官を選ばずに，また祭主の祖先である聖仙の名前を呼ばないのは，彼等 (Hotṛ と祭主 (?)) を死から放すため，またはこの二人を守るため。MS 1, 10, 18 [158, 3], KS 36, 12 [79, 5–6]/TB 1, 6, 9, 1–2。KB と GB は聖仙の名前を呼ばないということのみに言及し，それは，祭主を火の中に投げ込まないようにするためという。KB 5, 6 [21, 2] (5, 8, 14–15), GB 2, 1, 24 [161, 9–10]。

4-3-24. 供物を vedi のところに運んでいくとき，三種類の供物 (4–3–14, 4–3–15, 4–3–16 を参照) を一緒にもっていくと，祭主の家族のうち三人のものが，同時に死ぬということがおこるので，供物は一つ一つもっていくべし。そうすると，祭主の家族は一人一人年齢順に死ぬことができるようになる。TB 1, 6, 8, 9。

4-3-25. prayāja に関して。

4-3-25-1. 祭筵 (barhis) に対する prayāja を行なわないのは，barhis＝生類の等置にもとづいて，生類を死から放すため，または，生類を火のなかに投げ込まないようにするため，または生類を祖霊達のもとに置かないようにするためという。MS 1, 10, 18 [158, 3–4], KS 36, 12 [79, 6–7], TB 1, 6, 9, 2/KB 5, 7 [21, 8–9] (5, 8, 26–28)/GB 2, 1, 24 [161, 15–162, 2]。

4-3-25-2. barhis に対する prayāja を行なわないので prayāja は六つになる。そこで，季節は六つ，季節＝祖霊の等置にもとづき，祖霊を満足させる，または，祖霊を獲得するためという。KB 5, 7 [21, 9–10] (5, 8, 29–32)/GB 2, 1, 24 [162, 2–3]。

4-3-26. ājyabhāga 献供に関して。

4-3-26-1. ājyabhāga 献供を行なうのは，祭式の二つの目を排除しないためとされる。TB 1, 6, 9, 2–3。(4–3–3–9 を参照)

4-3-26-2. ājyabhāga 献供の祭文が「生きる」という語を含んでいるのは，祭主を生かすため。KB 5, 7 [21, 10–11] (5, 8, 33–34), GB 2, 1, 25 [162, 4–5]。

4-3-27. 祭綬を右肩から左脇下にかけて掛けるのは，神々に対する祭式と祖霊祭を区別するため。MS 1, 10, 18 [158, 5–6], KS 36, 12 [79, 7–8]。

4-3-28. Agni sviṣṭakṛt に対する献供のかわりに Agni kavyavāhana に対して行なうのは，祭式を完成させるため (samiṣṭi) であり，安定 (pratiṣṭhiti) のためである。MS 1, 10, 18 [158, 10–11], KS 36, 13 [79, 12–14]。

4-3-29. 神々に対する祭式において puronuvākyā と yājyā はそれぞれ一つずつであるが，この祖霊祭においては，二つの puronuvākyā と一つの yājyā が用いられるということに関して。

MS, KS によると，神々に対する祭式において，puronuvākyā によって神々に供物を捧げ，yājyā によって神々を去らせるとされるが，祖霊達は神々より更に遠いところにいるため，第三番目の yājyā によって更に供物を手渡すとする。MS 1, 10, 18 [158, 11–14], KS 36, 13 [79, 16–19]。

TB によると第一の puronuvākyā によって祖霊達に告げ知らせ，第二の puronuvākyā によって祖霊達を導いて来て，yājyā によって祖霊達を去らせるという。または，二つの puronuvākyā によってそれぞれ日と夜を遠くから連れてきて，yājyā によってそれらを到着させるという。TB 1, 6, 9, 4。

KB, GB によると第一の puronuvākyā によって祖霊達に呼びかけ，第二の puronuvākyā によって彼等を到着させ，第三の yājyā によって供物を捧げるという。KB 5, 7 [21, 14] (5, 8, 41–43), GB 2, 1, 25 [162, 5–8]。

4-3-30. 祭匙の底にバターを敷き，その上に三種の供物をいれ，その上からバターをかけて，五層の供物を用意するのは，祭式は五層 (pāṅkta) という主張にもとづいて，祭式を捕えるためという。MS 1, 10, 18 [158, 14]。

4-3-31. 供物を vedi の南のほうにすわって用意し，祭火の北のほうに進んでいくの

は，神々に対する祭式と祖霊祭を区別するため。TB 1, 6, 9, 4。

4-3-32. 供物の残りの iḍā 部分は，それに対して祭詞を唱え，においをかぐだけで，それを食べないのは，「祭主の家畜を火の中に投げ入れることがないように」と，思ってである。KB 5, 7 [21, 16–17] (5, 9, 5–7), GB 2, 1, 15 [162, 10–12]。

4-3-33. 供物の残りをダンゴにして，北を除く vedi の三隅に置くことに関して。

4-3-33-1. 祖霊達を満足させる。KB 5, 7 [21, 17–18] (5, 9, 8–9)。

4-3-33-2. 今までの献供によって祖霊を神として祭ってきた。vedi の隅にダンゴを置くことによって祖霊を人間として祭る。KS 36, 13 [79, 19–80, 2]。

4-3-33-3. 父，祖父，曽祖父の三人の名を呼ぶのは，祭主の家系が続くようにするためである。MS 1, 10, 18 [158, 18], KS 36, 13 [79, 20–21]。

4-3-33-4. すべての隅に置くのは，祖霊達はすべての方位にいるという主張にもとづいて，すべての方位にダンゴを届かせるためだという。MS 1, 10, 18 [158, 18–159, 1], KS 36, 13 [79, 21–22]。

4-3-33-5. 北の隅にダンゴを置かないのは，もし置くと，死が子孫をつかまえることとなるので，それを避けるため。MS 1, 10, 18 [159, 1–2], KS 36, 13 [79, 22–80, 1]。

4-3-33-6. 北の隅に，手についている残りをこすりつけるのは，それによって北の方角を満足させるため。MS 1, 10, 18 [159, 2], KS 36, 13 [80, 1–2]。

4-3-33-7. 「ここで，祖霊達よ，楽しめ[28]」という mantra を唱えるのは，「分け前どおりに食べよ」と言うのであって，このようにして祖霊達に与えることによって，彼等をこの祭式から排除することがないようにする。ŚB 2, 6, 1, 36。

4-3-34. 乳や水を清めるための草の束 (pavitra) をいれた水瓶のところで手を洗う[29]ことに関して。

4-3-34-1. 水＝静めの手段 (śānti)，治療薬の等置にもとづいて，祭式の最後のところで静めと治療が行なわれるという。KB 5, 7 [21, 18–19], GB 2, 1, 25 [162, 14–163, 2]。

4-3-34-2. その際に ṛc[30] を唱えるのは，祝福 (svastyayana) を与えるため。KB 5, 7 [21, 19] (5, 9, 11)。

---

28) ŚB がここで前提としている mantra は VS 2, 31, a: átra pitaro mādayadhvaṃ yathābhāgám ávṛṣāyadhvam「ここで祖霊達は分け前どおりに楽しめ。(飲物を) つげ」。

29) KB 5, 7 [21, 18] (5, 9, 10) atha yat pavitravati mārjayante. このテキストの解釈に関して [Caland 1932: 310] を参照。

30) KB 5, 7 [21, 19] (5, 9, 11) atra yad ṛcam japanti. この際に唱えるのがいかなる ṛc であるのか不明。

4-3-35. āhavanīya 祭火の前に立って礼拝を行なうことに関して。

4-3-35-1. TB によると，āhavanīya 祭火がありながら，ほかの所で献供を行なったので (1004頁参照)，そのことに関して āhavanīya 祭火に許しを請うという。TB 1, 6, 9, 7。

ŚB によると，祭火を設置した者 (āhitāgni) で，新月・満月祭を行なう者は，神々に心を向けているのであるが，今，祖霊に対する祭式を行なったので，そのことに関して神々に許しを請う。ŚB 2, 6, 1, 37。

KB によると，神々を満足させておいて，最後に神々に目的を告げるという。KB 5, 7 [21, 19–21] (5, 9, 13)[31]。

4-3-35-2. その際，息が切れるまで mantra を唱えるのは，Agni を目撃者 (upadraṣṭṛ) にして，気息の端にまで行く，または，Agni を目撃者にして，祖霊達を宥めるという。MS 1, 10, 19 [159, 3–5], KS 36, 13 [80, 2–5]/TB 1, 6, 9, 8。

4-3-35-3. その際「みめうるわしき汝を我々は」[32]という mantra を唱えるのは，みめうるわしきもの＝気息の等置にもとづいて，自分自身の中に気息を置くためという。TB 1, 6, 9, 8–9。

4-3-35-4. その際更に「Indra よ，二頭の黄色い馬を繋げ」と唱えるのは，気息を再び繋ぐためという。TB 1, 6, 9, 9。

4-3-36. gārhapatya 祭火の前に立って礼拝を行なうことに関して。

4-3-36-1. TB によると，その際，「彼等は食べた。彼等は楽しんだ」[33]という mantra を唱えるのは，「彼等祖霊達は食べ，そして楽しんだ。そこで今汝 gārhapatya 祭火を我々は礼拝しよう」ということを言うためという。TB 1, 6, 9, 9。

4-3-36-2. ŚB によると，その際，「今我々は心 (manas) を呼び寄せる」[34]と唱えるのは，今祖霊祭を行なったので，再び生者のもとに戻らねばならず，そのため

---

31) GB 2, 1, 25 [163, 7–9] prītvaiva tad deveṣv antato 'rdhaṃ caranti. これに対応する KB 5, 7 [21, 20–21] (5, 9, 13) のテキストは prītvaiva tad deveṣv antato 'rthaṃ vadante。この KB の読みに従って GB の 'rdhaṃ caranti を 'rthaṃ vadante に読み替えることを提案する。

32) TB が前提としている mantra は TS 1, 8, 5, c: susaṃdṛśaṃ tvā vayáṃ mághavan mandiṣīmáhi/prá nūnáṃ pūrṇavandhura stutó yāsi váśāṁ ánu/yójā nv̀ indra te hárī// 「みめうるわしき汝を，きまえよき者よ，我々は楽しません。今車の座席を満たして称えられたる汝は気のむくままに進み行く。今，Indra よ，汝の二頭の黄色い馬を繋げ」。

33) TS 1, 8, 5, d: ákṣann ámīmadanta hy áva priyā́ adhūṣata/ástoṣata svábhānavo víprā náviṣṭhayā matī́/yójā nv̀ indra te hárī// 「彼等は食べた。彼等は楽しんだ。愛しい者達はふりはらった。自ら輝く詩人達は最も新しい詩想によって称えられた。今，Indra よ，汝の二頭の黄色い馬を繋げ」。áva priyā́ adhūṣata「愛しい者達はふりはらった」の解釈については [Narten 1964: 154] を参照。

34) VS 3, 53 máno nv á hvāmahe nārāśaṁsena stoména/pitṝṇáṃ ca mánmabhiḥ// 「我々は今心を呼び寄せる，Narāśamsa に捧げられた賛歌によって，祖霊達の祈りによって」。

「我々は生者の仲間になかまいりしましょう」と唱えるという。ŚB 2, 6, 1, 39。

4-3-37. 太陽を礼拝することに関して。それは祖霊の世界から神々の世界に進んでいくため。KB 5, 7 [21, 21–23] (5, 9, 16–19), GB 2, 1, 25 [163, 5–7]。

4-3-38. 一連の礼拝が終わって再び祖霊祭のための祭場に戻るが，その際，「Soma 祭を行なった祖霊達は楽しんだ」[35]と唱えるのは，「祖霊達は楽しんだ。さてお前のもとに戻ろう」，または「彼等は分け前どおりに食べた」ということを言うためである。TB 1, 6, 9, 9/ŚB 2, 6, 1, 40。

4-3-39. 羊毛 (ūrṇā) または布のふち (daśā) を vedi に置くのは，彼等（祭官達）がここ祖霊祭の祭場にはいってきたことに対する償い (niravatti) であるとされる。MS 1, 10, 19 [159, 5–6], KS 36, 13 [80, 6–7]。

4-3-40. クッション (kaśipu)，敷物 (upabarhaṇa)，アイシャドウ (āñjana)，身体に塗る油 (abhyañjana) を vedi に置くのは，分け前どおりに彼等祖霊達を満足させるため。TB 1, 6, 8, 9。

4-3-41. 「Soma 祭を行なった祖霊達は去れ」という mantra[36]を唱えるのは，祖霊達は生者のもとにいつまでもいたがるかもしれないので，生者と祖霊達を分けるためである。MS 1, 10, 19 [159, 6–7], KS 36, 13 [80, 5–6]。

4-3-42-1. 水を撒きながら vedi の回りをまわるのは，祖霊達を洗うためである。MS 1, 10, 19 [159, 7–8], KS 36, 13 [80, 7–8], TB 1, 6, 9, 9, ŚB 2, 6, 1, 41。または，そうすることによって祖霊達を喜ばせ，そう知るものは子孫や家畜に喜ぶこととなる。TB 1, 6, 9, 10。

4-3-42-2. 水を撒かずに vedi の回りを逆回りにまわり，しかもその際，Prajāpati に捧げられた mantra[37] を唱えるのは，祖霊祭を行なうものはあの世に行くことになるので，Prajāpati にあの世から連れ出してもらうためである。MS 1, 10, 19 [159, 8–10], KS 36, 13 [80, 8–9]。

---

35) TB 1, 6, 9, 9 ámīmadanta pitáraḥ somyáḥ. ŚB の前提としている mantra は VS 2, 31, b: ámīmadanta pitáro yathābhāgám ávṛṣāyiṣata「祖霊達は分け前どおりに楽しんだ。(飲物を) ついだ」。

36) MS 1, 10, 3 [143, 8–9] páretana pitaraḥ somyāso gambhīrébhiḥ pathíbhiḥ pūrvébhiḥ/dádhatha no dráviṇaṃ yác ca bhadráṃ rayíṃ ca naḥ sárvavīraṃ níyachata//「Soma を祭った祖霊達よ，汝らは古くからある秘められた道を通って去れ。汝らは我々に財を置く，そしてめでたきものを。更にわれわれに全き勇者よりなる富みを与えよ」。KS 9, 6 [108, 18–19] páreta pitaras somyāso gambhīrébhiḥ pathíbhiḥ pūrviṇébhiḥ/dattváyāsmábhyaṃ dráviṇehá bhadráṃ rayíṃ ca nas sárvavīraṃ níyacchata//「……我々にここでめでたき財を与えたあとで，……」。

37) MS 2, 6, 12 [72, 4–5] prájāpate ná tvád etány anyó víśvā jātáni pári tá babhūva/yásmai káṃ juhumás tán no astu//「Prajāpati よ，汝以外にこれら一切の被造物を囲む者はいない。それを求めて我々が献供を行なう，それがわれわれに与えられるように」。

4-3-43.　帰命 (namas) の語をもつ mantra[38]を唱えて祖霊達を礼拝することに関して。

4-3-43-1.　たくし上げていた腰布を下げて[39]礼拝するのは，彼等祖霊達を祭式にふさわしいもの (yajñiya) にするため。ŚB 2, 6, 1, 42。

4-3-43-2.　六回礼拝するのは，季節の中に祭式を安定させるため。ŚB 2, 6, 1, 42。

4-3-43-3.　「祖霊達よ，我々に家を与えよ」[40] と唱えるのは，家を支配している祖霊達に願望を述べるのである。ŚB 2, 6, 1, 42。

4-3-44.　anuyāja に関して。

4-3-44-1.　祭筵 (barhis) に対する anuyāja を除いて二つの anuyāja を行なうのは，生類を死から放すため，または生類を祖霊達のもとに置くことがないようにと願ってである。TB 1, 6, 9, 10/ŚB 2, 6, 1, 4。

4-3-44-2.　四つの prayāja と二つの anuyāja を行なうのは，季節を満足させるため。TB 1, 6, 9, 10。

4-3-45.　sūktavāka の祭文を唱える際に祭主の名前を唱えない，または，祭主の願望を告げないのは，祭主を火のなかに投げ入れることがないようにするため。KB 5, 7 [21, 23–24] (5, 9, 20–21), GB 2, 1, 25 [162, 12–13]。

4-3-46.　patnīsaṃyāja 献供を行なわないのは，祭主の妻を守るため。TB 1, 6, 9, 10, KB 5, 7 [21, 24–25] (5, 9, 22–23), GB 2, 1, 25 [162, 13–14]。

4-3-47.　祖霊祭のための祭場からもとの祭火の所へもどることに関して。

4-3-47-1.　その際，韻律 paṅkti からなる祭文[41]を唱えてもどるが，それについて，祭式＝五層 (pāṅkta) の等置にもとづいて，祖霊祭を行なうことによって祖霊達のもとに行なっていた祭式とともにもどるためであるという。MS 1, 10, 19 [159, 12–13], KS 36, 13 [80, 11–12]。

4-3-47-2.　更に心 (manas) という語を伴った mantra[42] を唱えるのは心を呼び戻

38) VS 2, 32 a–f: námo vaḥ pitaro rásāya//námo vaḥ pitaraḥ śóṣāya//námo vaḥ pitaro jivâya//námo vaḥ pitaraḥ svadhâyai//námo vaḥ pitaro ghorâya//námo vaḥ pitaro manyáve námo vaḥ pitaraḥ pítaro námo vaḥ//「祖霊達よ，汝らのエッセンスに帰命す。祖霊達よ，汝らの乾きに帰命す。祖霊達よ，汝らの svadhā に帰命す。祖霊達よ，汝らの恐ろしさに帰命す。祖霊達よ，汝らの怒りに帰命す。汝らに帰命す，祖霊達よ，汝らに帰命す」。

39) この解釈について [Eggeling 1972(1882): 368] を参照。

40) VS 2, 32, g: gṛhán naḥ pitaro datta sató vaḥ pitaro deṣma「祖霊達よ，我々に家を与えよ。祖霊達よ，汝らに在るものを我々は与えよう」。

41) 注 33 に挙げた TS 1, 8, 5, d と同じ MS 1, 10, 3 [143, 12–14]。

42) 注 34 に挙げた VS 3, 53 と同じ MS 1, 10, 3 [143, 15–16] のほかに [143, 17–18] と [143, 19–144, 1]: á na etu mánaḥ púnaḥ krátve dákṣāya jiváse/jyók ca sū́ryaṃ dṛ́śe//púnar naḥ pitaro máno dádātu daívyo jánaḥ/jivā́ṃ vrā́taṁ sacemahi//「今心は再び来たれ，行為のために，巧みさのために，生きるために。そして長く太陽を見るために」「祖霊達よ，天の人は我々に心を再び与えよ。命ある者の掟に我々は加わろう」。これら同じ三つの mantra を KS 9, 6 [109, 10–15] が伝える。

すため。MS 1, 10, 19 [159, 13], KS 36, 13 [80, 12–13]。

4-3-48. Rudra に対する一皿の puroḍāśa に関して。

4-3-48-1. この供物が一皿であることに関して。MS, KS によると，人間（？）(puruṣa) は複数の皿 (kapāla) によっては得られないので，一皿の供物によって一度にそれ（人間）を得るという（？）[43]。MS 1, 10, 20 [159, 16], KS 36, 14 [80, 17–18]。

また MS はこの大地は一つという主張にもとづいて，祭主がこの大地に安定するためともいう。MS 1, 10, 20 [159, 16–17]。

TB によると，生類に関して分け前を与えて一度に Rudra を宥めるためという。TB 1, 6, 10, 1。

ŚB によると，それらの供物が唯一の神に捧げられるようにと考えてである ŚB 2, 6, 2, 3。

4-3-48-2. この供物を祭主の家族構成員と同じ数だけ準備するのは，家族構成員一人一人に関して分け前を与えて Rudraを宥めるため (KS)，または，既に生まれている子孫のために Rudra 達を宥めるため (TB)，または，彼等を Rudra の影響 (rudriya) より解放するため (ŚB)。KS 36, 14 [80, 16], TB 1, 6, 10, 1, ŚB 2, 6, 2, 4。

4-3-48-3. この供物の数が更に家族構成員の数より一つ多いのは，胎児のために Rudra を宥めるため (KS)，または，これから生まれてくるであろう子孫のため Rudra 達を宥めるため，または，まだ生まれていない子孫を Rudra の影響より解放するため (ŚB)。KS 36, 14 [80, 16–17], TB 1, 6, 10, 1, ŚB 2, 6, 2, 4。

4-3-49. この供物を祭匙の中に置いたあとで，上からバターをかけるかどうかに関して，KS, TB, ŚB は，もしバターをかけると Rudra が家畜を襲うようになるといって，これを禁止するが，MS はこの議論を否定して，供物なら上からバターをかけるべしという。MS 1, 10, 20 [159, 17–19], KS 36, 14 [80, 18–20], TB 1, 6, 10, 1, ŚB 2, 6, 2, 6。

4-3-50. Rudra に対するこの献供は本来の祭場を離れたところで行なわれるので，そこに行くまえに，dakṣiṇāgni 祭火から一本のけむっている薪を取りだすが，そのことに関して。

4-3-50-1. その祭火から薪をまず西の方に取りだすのは，Rudra を人間世界とは反対の方に運びだすためである。MS 1, 10, 20 [160, 2], KS 36, 14 [80, 21–22]。

43) MS 1, 10, 20 [159, 16] ná vaí púruṣaḥ kapálair ápya ekadhaívaínam āpnoti. KS 36, 14 [80, 17–18] na vai puruṣaṃ kapālair āptum arhaty ekadhaivainam āpnoti.

4-3-50-2. そしてその薪を北の方に運ぶのは，この方角に Rudra 達の家がある，またはこの方角は Rudra の方角という主張にもとづいて，自分の家または自分の方角で Rudra を宥めるためであるとする。KS 36, 14 [80, 22–81, 1], TB 1, 6, 10, 2。

4-3-51. Rudra に対するこの献供が行なわれる場所に行く途中で，一つの供物をモグラの穴の中に投げ入れる。それは家畜のために Rudra を宥めるため (MS, KS)。またはそうすることによって Rudra は家畜を殺さないようになる (TB, ŚB)。さらにまだ生まれていない子孫を Rudra の影響より解放するため (ŚB)。MS 1, 10, 20 [160, 2–3], KS 36, 14 [81, 1–2], TB 1, 6, 10, 2–3, ŚB 2, 6, 2, 10。

4-3-52. Rudra に対する献供に関して。

4-3-52-1. 十字路で行なわれるのは，十字路に Rudra 達の家があるという主張にもとづいて，Rudra を家で宥めるためという。MS 1, 10, 20 [160, 4–5], KS 36, 14 [81, 2–3]。

4-3-52-2. parṇa または palāśa (Butea frondosa) の葉は一本の葉柄から三枚の葉が出ていて，そのまんなかの葉を用いて献供を行なうことに関して。MS によるとそれは森に属するもの (āraṇya) によって献供を行なうことであり，森において Rudra を宥めることとなるという。ŚB は，まんなかの葉＝brahman の等置にもとづき，brahman によって献供を行なうとする。MS, KS によると，もし普通の器 (pātra) あるいは村に属するもの (grāmya) によって献供を行なうと，Rudra を家畜のもとに導いてしまうことになるという。TB はさらにまんなかでなく端の葉を用いての献供の可能性も許し，それは最後に Rudra を宥めるためという。MS 1, 10, 20 [160, 7–9], KS 36, 14 [81, 5–7], TB 1, 6, 10, 3, ŚB 2, 6, 2, 8。

4-3-52-3. 献供の際に「Rudra よ，これは汝の分け前なり。妹 Ambikā とともにこれを嘉納せよ」[44] と唱えるのは，Ambikā とともに Rudra を宥めるため (MS, KS)，または静めるため (TB)，または既に生まれている生類を Rudra の影響より解放するため。MS 1, 10, 20 [160, 5–6], KS 36, 14 [81, 3–5], TB 1, 6, 10, 3, ŚB 2, 6, 2, 8。

4-3-52-4. 献供の後に「Amba よ，我々は Rudra を宥めた」[45] という mantra を唱えると，それによって負債がないもの (anṛṇa) となるという。MS 1, 10, 20

44) MS 1, 10, 4 [144, 4–5]＝KS 9, 7 [110, 1–2]＝TS 1, 8, 6, f＝VS 3, 57, a: eṣá te rudra bhāgás tám juṣasva sahá svásrāmbikayā svāhā//.

[160, 9–10], KS 36, 14 [81, 7]。

4-3-52-5. さらに「牛に対する，馬に対する治療薬なり」[46] という mantra を唱えるのは，負債がない状態になって，治療薬を作るため (MS, KS)，または村の家畜すべてに対して治療薬を作るため。MS 1, 10, 20 [160, 10–11], KS 36, 14 [81, 7–8], TB 1, 6, 10, 4。

4-3-53. この献供の後で，供物の残りをもって，祭主の家族が献供の行なわれた火の回りを三回歩きまわることに関して。

4-3-53-1. その際「我々は Tryambaka を祭る」[47] という mantra を唱えるのは，「わたしは死からときはなたれよう，しかし不死からはときはなたれることがないように」ということをいうためである。TB 1, 6, 10, 5, ŚB 2, 6, 2, 12。

4-3-53-2. 結婚適令期の祭主の娘も火の周りを三回歩くのは彼女が夫を得ることができるようにするためである。MS 1, 10, 20 [160, 11–12], KS 36, 14 [81, 8–10]。

4-3-53-3. 歩きまわりながら供物の残りを上に投げて再びつかむのは，幸運 (bhaga) をつかむためである。MS 1, 10, 20 [160, 12–13], KS 36, 14 [81, 10], TB 1, 6, 10, 5。

4-3-53-4. 上に投げて再びつかんだ供物の残りを祭主の掌に置くのは，祭主に幸運を得させるためである。MS 1, 10, 20 [160, 13–14], KS 36, 14 [81, 11]。

4-3-53-5. さらにその供物の残りを結婚適令期の祭主の娘の掌にも置くのは，彼女に幸運を得させるためである。MS 1, 10, 20 [160, 14], KS 36, 14 [81, 11–12]。

---

45) MS 1, 10, 4 [144, 6–9] ávāmba rudrám adimahy áva devāṃ tryàmbakam/yáthā no vásyasas kárad yáthā naḥ śréyasas kárat/yáthā no bhū́yasas kárad yáthā naḥ pratarāṃ tirád yáthā no vyavasāyáyāt// 「Amba よ，我々は Rudra を宥めた，神 Tryambaka を，彼が我々をより豊かにしてくれるように，彼が我々をより幸福にしてくれるように，彼が我々をより多くにしてくれるように，彼が我々をより前へと導いてくれるように，彼が我々を固く決心させてくれるように」。KS 9, 7 [110, 3–4] ávāmba rudrám adimahy áva devāṃ tryàmbakam/ yáthā no vásyasas kárad yáthā naś śréyasas kárad yáthā no vyavasāyáyāt//。

46) MS 1, 10, 4 [144, 10–11]＝TS 1, 8, 6, g: bheṣajáṃ gáve áśvāya púruṣāya bheṣajám/átho asmábhyaṃ bheṣajáṁ súbheṣajaṃ yáthāsati sugáṃ meṣā́ya meṣyaì// 「牛に対する，馬に対する治療薬なり。人間に対する治療薬なり。更に我々に対する治療薬なり，よき治療薬なり。牡羊に，牝羊によき道があるように」。KS 9, 7 [110, 5–6] bheṣajáṃ gávé 'śvāya púruṣāya sugáṃ meṣā́ya meṣyaì/átho asmábhyaṃ bheṣajáṁ súbheṣajaṃ yáthāsati// 「牛に対する，馬に対する治療薬なり。人間に対する治療薬なり。牡牛に対する，牝羊に対するよき道なり。更に我々に対する治療薬があるように」。

47) TS 1, 8, 6, i＝VS 3, 60, a (＝RV 7, 59, 12) tryàmbakaṃ yajāmahe sugándhiṃ puṣṭivárdhanam/urvārukám iva bándhanān mṛtyór mukṣīya mā́mṛtāt// 「我々は Tryambaka を祭る，匂いよきものを，繁栄を増やしてくれるものを。カボチャを茎から（はなす）ように，私は死からはなれよう，不死からははなれることがないように」。

4-3-54. Rudra に対して唱える mantra[48] に関して。

4-3-54-1. 供物の残りを籠にいれて「Rudra よ，これはお前の分け前なり」と唱えて木に掛けるのは，Rudra に彼自身の分け前 (MS, KS)，または旅の食料を与えて去らせるためである。MS 1, 10, 20 [160, 15–161, 1], KS 36, 14 [81, 12–15], TB 1, 6, 10, 5, ŚB 2, 6, 2, 17。

4-3-54-2. 「Rudra よ，これはお前の分け前なり」と唱えるのは，Rudra を宥めるためである。TB 1, 6, 10, 5。

4-3-54-3. 「皮衣を着て」と唱えるのは，Rudra を眠らせるためで，眠った彼はなにものも損なうことがないからである。ŚB 2, 6, 2, 17。

4-3-55. この献供が終わって再びもとの祭場に戻ることに関して。

4-3-55-1. 帰るとき後ろを振り向かないのは，Rudra が後からついてこないようにするためである。MS 1, 10, 20 [161, 1–2], KS 36, 14 [81, 15], TB 1, 6, 10, 5。

4-3-55-2. 帰路，家畜小屋より遠くのところで (parogoṣṭham) からだを洗うのは，そこで Rudra を宥めるためである。MS 1, 10, 20 [161, 2]。または，もとの祭場に戻って来てから，水に触れるのは，静める手段である水によって静めるためである。ŚB 2, 6, 2, 18。

4-3-56. 祭場に帰ってからの祭火の礼拝に関して。

4-3-56-1. 「汝は薪なり。願わくば，我々の栄えんことを」と唱えるのは，Rudra を宥めて繁栄に赴くためである。KS 36, 14 [81, 15–16]。

4-3-56-2. 「汝は薪なり。願わくば，我々のともに栄えんことを」と唱えるのは，願望を表明するため。KS 36, 14 [81, 16–17]。

4-3-56-3. 「汝は光輝 (tejas) なり。光輝を我に置け」と唱えるのは，光輝を自分自身の中におくため。KS 36, 14 [81, 17]。

4-3-57. Aditi に対する caru の献供に関して。Aditi＝大地の等置にもとづいて，この大地に安定するため。MS 1, 10, 20 [161, 4–6], KS 36, 14 [81, 18–21], TB 1, 6, 10, 5, GB 2, 1, 25 [163, 12–13]。

---

48) MS 1, 10, 4 [144, 14–15] rúdraiṣá te bhāgás ténāvaséna paró mū́javató 'tīhi/pinākahastaḥ kṛ́ttivāsā ávatatadhanvā// 「Rudra よ，これは汝の分け前なり。それを旅の食料にして Mūjavat 山のかなたに去れ。棍棒を手にして，皮衣をまとい，弓を緩めて」。KS 9, 7 [110, 9–10] eṣá te rudra bhā́gas ténāvaséna paró mū́javató 'tīhi/kṛ́ttivāsāḥ pínākahastó 'vatatadhanvā//. TS 1, 8, 6, k–1: eṣá te rudra bhāgás tám juṣasva ténāvaséna paró mū́javató 'tīhi/ávatatadhanvā pínākahastaḥ kṛ́ttivāsāḥ// 「Rudra よこれは汝の分け前なり。それを嘉納せよ。……」。VS 3, 61 etát te rudrāvasám téna paró mū́javató 'tīhi/ávatatadhanvā pínākāvasaḥ kṛ́ttivāsā áhiṁsan naḥ śivó 'tīhi// 「Rudra よ，これは汝の旅の食料なり。……棍棒と旅の食料をもって，……我々に害をなすことなく優しき汝は去れ」。

4-3-58. 最後に満月祭を行なうのは，整備された祭式 (kḷpta yajña) によって最後に安定するためである。ŚB 2, 6, 2, 19。

B. まとめ

Sākamedha 祭は二日間にわたって行なわれる祭式である。二日目の午後には更に祖霊祭と Rudra 神に対する Tryambaka 祭が行なわれる。本論3章で扱った各祭式毎の包括的な解釈において，3–4. の Sākamedha 祭全体の解釈に並んで 3–5. では Sākamedha 祭の中心的な献供である Mahāhavis に対して，3–6. では祖霊祭に対して，また 3–7. では Tryambaka 祭に対する解釈が別々に与えられていた。上述の 4–3. では祖霊祭および Tryambaka 祭をも含んだ Sākamedha 祭の個々の祭式行為に対する解釈を要約したが，これからそれらを再検討するにあたり，4–3. の全項目を三つに，すなわち (I) Mahāhavis までの部分 (4–3–1 から 4–3–13) と (II) 祖霊祭の部分 (4–3–14 から 4–3–47) そして (III) Tryambaka 祭の部分 (4–3–48 から 4–3–58) に分けて考察してみたい。

B–I　Sākamedha 祭の Mahāhavis までに関して

本論2章の Cāturmāsya 祭を構成する各祭式の名称を列挙しての Cāturmāsya 祭の解釈において，2–1. では Sākamedha 祭に対して Vṛtra 殺し (MS, KS, ŚB) または祭主の安定 (TB) という機能が付与されていた。この全体的解釈のうち Vṛtra 殺しのテーマがここの祭式行為に対する解釈においても前面にでているようである。神話の世界において Vṛtra 殺しは，神々の代表である Indra の最大のいさおしであるが，Brāhmaṇa 文献における神話の大きな傾向としての神々の非個性化の結果として，Indra と Vṛtra のいわば一騎討的戦いは，神々と Asura 達との全体的な戦いへと変質させられ，その結果としての神々と Asura 達との戦いのモティーフがこの Sākamedha 祭の解釈においても用いられている。

1.　Vṛtra 殺し，または神々と Asura 達との戦いに関する項目に以下のものがある。

Vṛtra 殺しの神話にかかわるもの：4–3–1–1 (MS, KS, ŚB), 4–3–2–3 (ŚB), 4–3–3–2 (ŚB), 4–3–6–1 (TB), 4–3–6–2 (ŚB), 4–3–8 (MS, KS, TB), 4–3–9 (ŚB)。[七項目]

Asura との戦いにかかわるもの：4–3–1–3 (TB), 4–3–1–5 (TB), 4–3–2–1 (TB), 4–3–3–1 (TB), 4–3–3–4 (MS), 4–3–5–2 (MS, KS), 4–3–6–1 (MS, KS)。[七項目][49]

Indra が Vṛtra を殺すということ，または神々が Asura 達と戦って勝利を博すると

49) Vṛtra 殺しのエピソードと神々と Asura 達の戦いのエピソードのうち ŚB は Vṛtra 殺しのエピソードのみを解釈に用いている。TB は一例を除いて主として Asura 達との戦いのエピソードを使い，MS, KS は双方に言及している。

いう神話的事実は，現実世界において祭主が彼の敵対者 (bhrātṛvya) に勝つという結果と結びつけられる[50]。従ってなんらかのかたちで敵対者を苦しめるという項目もここに算入してよいと思われる：4–3–2–2 (TB), 4–3–3–5 (MS, KS), 4–3–4–3 (TB), 4–3–5–2 (KS, TB)。[四項目]

Indra 神が祭主のもとに来る：4–3–3–12 (TB), Indra 神に呼びかける：4–3–5–2 (MS, KS; ŚB), 勝利のため：4–3–6–3 (MS, KS), 出陣のため：4–3–1–2 (MS, KS) もここに数える。[四項目]

2. 2–1. で TB は Sākamedha 祭の機能として祭主の安定を説き，3–5–2. で ŚB は Mahāhavis に繁殖と栄光の獲得という効果を付与した。このように祭主に善き状態を招来するということに関する項目としては以下のものがある。

一切の行為が成就：4–3–10 (MS, KS, TB, ŚB), 祭式の完全な成就 (samiṣṭi) と安定 (pratiṣṭhiti) のため：4–3–3–10 (MS, KS, TB), 祭主が栄える：4–3–6–4 (TB), 祭主を栄えさせる：4–3–3–9 (KB), 祭主に分け前を与える：4–3–5–4 (TB), 祭主が二種の栄養を摂取：4–3–3–3 (ŚB), 祭主に子孫が生まれる：4–3–12–4 (MS, KS), 祭主が家畜に富む：4–3–3–8 (TB), 家畜が栄養を摂取：4–3–4–1 (ŚB), 祭主が家畜の中に安定する：4–3–3–11 (TB), 星宿 (nakṣatra) 的 virāj (注12を参照) の獲得：4–3–13 (KB), 不死性 (amṛtatva) に触れる：4–3–12–1 (MS, KS), Nirṛti を遠ざける：4–3–5–3 (MS, KS)。[十三項目]

祭主の妻に関して：4–3–3–6 (TB)。

3. 祭式に関する項目に以下のものがある。

祭式の実現：4–3–3–7 (MS, KS), 祭式の継続：4–3–3–12 (MS, KS), 4–3–5–1 (KB, GB), 祭式の目を排除しない：4–3–3–9 (TB), Sākamedha 祭の実現：4–3–4–1 (MS, KS), 4–3–4–2 (MS, KS), 各献供の継続と三十の献供の実現：4–3–11 (MS, KS)。[六項目]

4. 諸神格に関するもの。

神々を満足させる：4–3–1–4 (KB, GB), 太陽を満足させる：4–3–10 (KB, GB), 年を取り戻す：4–3–12–2 (MS, KS), 季節を年の中に，祭主を年の中に入れる：4–3–12–3 (MS, KS)。[四項目]

Sākamedha 祭に対する全体的解釈において Indra 神による Vṛtra 殺しの神話的モティーフが用いられていたが，個々の祭式行為に対する解釈もこの Vṛtra 殺しのモティーフおよびそれに対応する神々の Asura に対する勝利のモティーフによって

50) 例えば上の 4–3–2–3, 4–3–3–2, 4–3–3–4。

主として行なわれている。そしてこの二つの神話的モティーフは現実世界においては，祭主による敵対者の克服と読み替えられる。祭主によって克服されるという敵対者 (bhrātṛvya) が具体的にどのような存在であり，敵対者を克服するとは具体的にどのような出来事を意味しているのかは明確ではないが，その曖昧さを残して，Sākamedha 祭に想定されるであろう機能として次のことを主張したい。つまり神話的世界における Indra による Vṛtra 殺し，または神々による Asura 達の征服に対応して，この祭式を行なうことによって現実世界において祭主が彼の敵対者を克服し，その結果として祭主が現実世界における繁栄を獲得すると。

B–II　祖霊祭に関して

Sākamedha 祭の二日目の午後に行なわれる祖霊祭の個々の祭式行為に対応する解釈は 4–3–14 から 4–3–47 においてなされた。その結果を更に次のようにまとめてみる。祖霊祭であるからこの祭式の主たる対象は祖霊である。

1.　祖霊にかかわる項目として以下のものがある。

祖霊達を満足させる：4–3–19–1 (TB), 4–3–25–2 (KB, GB), 4–3–33–1 (KB), 4–3–40 (TB), 4–3–42–1 (MS, KS, TB, ŚB: 洗う)。[五項目]

祖霊達を宥める：4–3–35–2 (TB)。[一項目]

祖霊達が来るように願う：4–3–19–1 (MS)。[一項目]

祖霊達を祭る，あるいはそれに関連する項目：4–3–33–2 (KS), 4–3–33–4 (MS, KS), 4–3–33–7 (ŚB), 4–3–43–1 (ŚB)。[四項目]

家を支配する祖霊達への願望：4–3–43–3 (ŚB)。[一項目]

2.　祖霊達は死者であり，死と深くかかわっている。そこで祖霊達を祭ることによって，死とのかかわりを断つ。

生者と祖霊達を分ける：4–3–41 (MS, KS)。

祭主を死から放す：4–3–21 (TB)。

祭主が早死せず，拠所を失わない：4–3–20 (TB)。

祭主と Hotṛ 祭官を死から放す／守る：4–3–23 (MS, KS/TB)。

祭主の妻を（死から）守る：4–3–46 (TB, KB, GB)。

生類を死から守る：4–3–25–1 (MS, KS, TB, KB, GB), 4–3–44–1 (TB, ŚB)。

祭主を火の中に投げ込まない：4–3–23 (KB, GB)。

祭主の家畜を火の中に投げ込まない：4–3–32 (KB, GB)。[九項目]

死とのかかわりを断ち，順調な生を全うする。

祭主を生かす：4–3–26–2 (KB, GB)。

家族の一人一人が年齢順に死ぬ：4–3–24 (TB)。

祭主の家系が継続する：4–3–33–3 (MS, KS)。[三項目]

3.　祖霊祭を行なうものはこの世から出，あの世に行く[51]。従って再びこの世に帰らなければならない。

祭主がこの世に帰ってくる：4–3–19–2 (KS)。

祭主が生者のもとに戻る：4–3–36–2 (ŚB)。

Prajāpati にあの世から連れ出してもらう：4–3–42–2 (MS, KS)。

祭式とともに戻る：4–3–47–1 (MS, KS)。[四項目]

次の解釈もこの項目に入れる。

āhavanīya 祭火の前で息が切れるまで mantra を唱えて礼拝をするのは，Agni を目撃者として気息の端まで行くこととされた (4–3–35–2)。そこでその気息を自分自身の中に置く：4–3–35–3 (TB)。

そしてその気息を再び繋ぐ：4–3–35–4 (TB)。

祖霊祭の終わりにあたり再び心 (manas) を呼び戻す：4–3–47–2 (MS, KS)。[三項目]

4.　祖霊祭は神々に対する普通の祭式とは異なる祭式である[52]。従って祖霊祭と神々に対する祭式を区別する必要がある：4–3–17 (TB), 4–3–18 (TB), 4–3–27 (MS, KS), 4–3–31 (TB)。[四項目]

祖霊祭が実現される：4–3–16–2 (MS, KS)。[一項目]

祖霊祭の特殊性に関連する項目：4–3–29 (MS, KS/TB/KB, GB), 4–3–35–1 (TB, ŚB), 4–3–36–1 (TB), 4–3–38 (TB, ŚB), 4–3–39 (MS, KS), 4–3–37 (KB, GB)。[六項目]

5.　この祖霊祭は神々に対する祭式の一つの基本形 (iṣṭi) に従って行なわれるので，祭式の完成を期す解釈も行なわれる。

祭式が実現する：4–3–14–3 (MS, KS)。

祭式を捕える：4–3–30 (MS)。

季節の中に祭式を安定させる：4–3–43–2 (ŚB)。

祭式と人間のあいだを塞がない：4–3–22 (TB)。

---

51) KS 36, 12 [78, 20–21] eti vā eṣo 'smāl lokād yaḥ pitṛyajñaṃ paryeti (4–3–19–2 及び注 27 を参照)。MS 1, 10, 19 [159, 8–9] amúṃ vā eté lokáṃ nígachanti yé pitṛyajñéna cáranti「祖霊祭を行なうものはあの世に赴く」。KS 36, 13 [80, 8–9] amuṃ vā ete lokaṃ nigacchanti ye pitṛyajñam upayanti (4-3-42-2を参照)。

52) 祖霊祭を神々への祭式と区別するものに次のようなものがある：例えば，祭綬を右肩から左脇に掛ける，南の方向が強調される，神々への祭式では時計回りで行なわれるものが逆に行なわれる，神々の祭式で三度繰り返されるものが一度だけ行なわれる，などである。

祭式の二つの目を排除しない：4–3–26–1 (TB)。

祭式を妨げる Rakṣas 達を追い払う：4–3–21 (TB)。

祭式の完成 (samiṣṭi) と安定 (pratiṣṭhiti)：4–3–28 (MS, KS)。[七項目]

6.　この祖霊祭に特徴的なことは，年や季節などのいろいろな時間の単位を満足させるという MS, KS, TB の解釈である。

一年を満足させる：4–3–14–1 (TB)。

一年の夜を満足させる：4–3–15–2 (MS, KS)。

季節を満足させる：4–3–14–2 (MS, KS), 4–3–19–2 (TB), 4–3–44–2 (TB)。

季節が栄える：4–3–15–1 (TB)。

月々を満足させる：4–3–15–1 (TB)。

半月を満足させる：4–3–16–1 (TB)。[八項目]

7.　更に次のような項目がある。

神々を満足させ，目的を告げる：4–3–35–1 (KB)。

北の方角を満足させる：4–3–33–6 (MS, KS)。

治療が行なわれる：4–3–34–1 (KB, GB)。

祝福のため：4–3–34–2 (KB)。

祖霊祭の個々の祭式行為に対する解釈を更に上のように要約してみたが，それにもとづき祖霊祭に付与される機能として次のことを主張したい。つまり祖霊祭を行なうことによって祖霊達を満足させ（要約 1.），更に早死などの死とのかかわりを断ち，順調な生を全うすることができる（要約 2.）と。要約3. 4. 5. は祭式としての祖霊祭の特異性に関係するもので，祖霊祭の機能を考える今，度外視してよい。年や季節などいろいろな時間の単位を祖霊祭によって満足させる（要約 6.）という解釈の意味確定は留保しておき，祖霊祭に対する解釈の特異点として注意を促しておくにとどめる。

B–III　Tryambaka 祭に関して

Sākamedha 祭の二日目の午後，祖霊祭のあとで行なわれる Rudra 神に対する Tryambaka 祭の個々の祭式行為に対する解釈は 4–3–48 から 4–3–58 で示した。その結果を要約すると次のようになる。

1.　恐ろしい神 Rudra を宥め，その神との関係をできるだけ避けようとする。

Rudra 神を宥める (nir-ava-dā)：4–3–48–1 (TB：生類に関して)，4–3–48–2 (KS：家族一人一人に関して；TB：既に生まれている子孫に関して)，4–3–48–3 (KS：胎児に関して；TB：将来生まれてくる子孫に関して)，4–3–50–2 (KS：Rudra の家で；TB：Rudra の方角で)，4–3–51 (MS, KS：家畜に関して)，4–3–52–1 (MS, KS：

Rudra の家で), 4–3–53–2 (MS: 森で; TB), 4–3–52–3 (MS, KS), 4–3–54–2 (TB), 4–3–55–2 (MS)。[十項目]

唯一の神に供物を捧げる：4–3–48–1 (ŚB)。Rudra 神を静める (śam-): 4–3–52–3 (TB), 4–3–55–2 (ŚB)。[二項目]

Rudra の影響より解放する (rudriyāt pra-muc): 4–3–48–2, 4–3–52–3 (ŚB: 既に生まれている子孫を), 4–3–48–3, 4–3–51 (ŚB: まだ生まれていない子孫に関して)。[四項目]

Rudra がついて来ないように：4–3–55–1 (MS, KS, TB)。

Rudra を人間世界と反対の方へ運びだす：4–3–50–1 (MS, KS)。

災をもたらさぬよう，Rudra を眠らせる：4–3–54–3 (ŚB)。

Rudra に分け前を与えて去らせる：4–3–54–1 (MS, KS, TB, ŚB)。

Rudra が家畜に災をもたらさないように：4–3–49 (KS, TB, ŚB), 4–3–51 (TB), 4–3–52–2 (MS, KS)。[三項目]

2. 恐ろしい神 Rudra を宥めて，祭主によいことがおこる。

Rudra を宥めて繁栄に至る：4–3–56–1 (KS)。

繁栄を求めての願望の表明：4–3–56–2 (KS)。

祭主が幸運 (bhaga) をつかむ：4–3–53–3 (MS, KS, TB)。

祭主に幸運を得させる：4–3–53–4 (MS, KS)。

祭主が光輝 (tejas) を自分自身の中に置く：4–3–56–3 (KS)。

祭主が大地で安定する：4–3–48–1 (MS), 4–3–57 (MS, KS, TB, GB)。[二項目]

整備された祭式 (kḷpta yajña) により祭主が安定する：4–3–58 (ŚB)。

祭主が負債を持たないもの (anṛṇa) となる：4–3–52–4 (MS, KS)。

祭主は死から解放され，不死を得る：4–3–53–1 (TB, ŚB)。

一度に人間 (puruṣa) を得る（？）：4–3–38–1 (MS, KS)。

治療薬が作られる：4–3–52–5 (MS, KS; TB: ：家畜のため)。

祭主の娘が夫を得る：4–3–53–2 (MS, KS)。

祭主の娘に幸運 (bhaga) を得させる：4–3–53–5 (MS, KS)。

3. brahman（祭式に内在する呪力）による献供：4–3–52–2 (ŚB)。

上にまとめた三十八項目のうちの大半をしめる二十四項目が恐ろしい神 Rudra を宥め，彼とのかかわりを断とうとする配慮についやされている。祭主の家族の一人一人に対して，更には将来生まれるであろう子孫に対して，そして祭主の家畜に対して Rudra 神がもたらすであろう災を，この祭式によって彼を宥めることによって，防

ぎ，遠ざけ，その結果祭主は災のない生活を送ることができるというのが，この祭式に対して想定された機能であろう。

4-4. Śunāsīrīya 祭の個々の祭式規定に関して

A. 分　析

4-4-1. Indra śunāsira に対する十二皿の puroḍāśa に関して，TB は Indra śunāsira＝一年の等置にもとづき一年によって祭主のために食物を獲得するためといい，GB は同様の Śunāsira＝一年の等置にもとづき，一年を満足させるためといい，KB は Śunāsirā（双数）＝静め (śānti) および治療薬の等置にもとづき，最後に静めと治療薬が祭式に施されるという。TB 1, 7, 1, 1, GB 2, 1, 26 [164, 6–7], KB 5, 8 [22, 12–14] (5, 10, 4–6)。

4-4-2. Vāyu に対するミルク (payas) に関して。

4-4-2-1. 供物がミルクであるのは，生まれたばかりの生類はミルクを求めるという主張にもとづいて，「生まれた子孫が勝利を博した私を栄光 (śrī) のため，名声 (yaśas) のため，食物のために喜んで求めるように」と望んでである。ŚB 2, 6, 3, 6。

4-4-2-2. 祭神が Vāyu（風の神）であることに関して，TB は，Vāyu は雨を与えるものという主張にもとづいて，Vāyu が祭主に雨を与えることとなるといい，KB, GB は Vāyu＝気息 (prāṇa) の等置にもとづいて，気息を満足させるためという。TB 1, 7, 1, 1, KB 5, 8 [22, 14] (5, 10, 17–19), GB 2, 1, 26 [164, 5–6]。

4-4-3. Sūrya（太陽の神）に関する一皿の purodāśa に関して，TB は，Sūrya によりこの世界では雨が抑えられるという主張にもとづいて，Sūrya が祭主のために雨を抑制するといい，ŚB は，「これ (Sūrya) が勝利を博した私に満足して良いことに (sādhu) よって守り，良いことの中に私を置くように」願ってであるといい，KB, GB は Sūrya を満足させるためという。TB 1, 7, 1, 1, ŚB 2, 6, 3, 8, KB 5, 8 [22, 15] (5, 10, 20–22), GB 2, 1, 26 [164, 7–8]。

4-4-4. 祭式の報酬 (dakṣiṇā) に関して。TB によると十二頭の牛に繋がれた犁が報酬で，それは繁栄 (samṛddhi) のためとされる。また ŚB によると白い馬または白い牛とされ，KB, GB によると白い牝牛とされ，ともに太陽の形 (rūpa) を実現するためとされる。TB 1, 7, 1, 2, ŚB 2, 6, 3, 9, KB 5, 8 [22, 15–16] (5, 10, 23–25), GB 2, 1, 26 [164, 8–9]。

B. まとめ

Sākamedha 祭の第四で，最後の構成要素である Śunāsīrīya 祭の解釈は MS, KS を除く中層，新層の Brāhmaṇa 文献，すなわち TB, ŚB, KB, GB によってごく簡

潔に行なわれている。それを次の三つの項目に要約してみる。

1.　祭主に望ましい結果を招来する。

一年によって祭主のため食物を獲得する：4–4–1 (TB)。

生まれた子孫が勝利を博した祭主を栄光 (śrī)，名声 (yaśas)，食物のために求める：4–4–2–1 (ŚB)。

風 (Vāyu) が祭主に雨を与える：4–4–2–2 (TB)。

太陽 (Sūrya) が祭主のため雨を抑制する：4–4–3 (TB)。

Sūrya が勝利を博した祭主に満足し，良いこと (sādhu) で守り，良いことの中に祭主を置く：4–4–3 (ŚB)。

繁栄のため：4–4–4 (TB)。

2.　諸神格を満足させる。

一年を満足させる：4–4–1 (GB)。

気息を満足させる：4–4–2–2 (KB, GB)。

太陽を満足させる：4–4–3 (KB, GB)。

太陽の形 (rūpa) を実現する (ŚB, KB, GB)。

3.　静めと治療薬が祭式に施される：4–4–1 (KB)。

Śunāsīrīya 祭の個々の祭式行為に対する解釈は四つの Brāhmaṇa 文献によってごく簡単に与えられている。各 Brāhmaṇa 文献が Śunāsīrīya 祭に想定する機能は，項目が少ないゆえに，各文献ごとにニュアンスの差がかなりよくわかる。TB は適切な雨による食物の獲得を基礎とした繁栄と即物的に表現している。ŚB は食物のほかに栄光 (śrī)，名声 (yaśas)，良いこと (sādhu) などと，求める対象を TB よりは抽象的に表現している。KB, GB は一年や気息や太陽などの神格を満足させ，静めと治療薬が祭式に施されると祭式中心的な解釈が施されている。これらの表現を無理であるかもしれないが，適切な自然の運行による食料の確保と繁栄を得る，と言い換えてみる。

結　　論

1.　本論第 4 節のまとめ

このように多くの紙数を費やして，4–1 において Vaiśvadeva 祭の，4–2 において Varuṇapraghāsa 祭の，4–3 において Sākamedha 祭の，4–4 において Śunāsīrīya 祭の個々の祭式行為に対する解釈を要約し，その分析にもとづいてそれぞれの祭式に

どのような機能が想定されているかをみてきた。その結果をここでまとめてみると次のようになる。

4-1. Vaiśvadeva 祭：子孫と家畜の誕生と，豊かな食料による成長を基礎とした祭主の安定した繁栄。

4-2. Varuṇapraghāsa 祭：恐ろしい神 Varuṇa を宥め，満足させ，悪しき状態を除き，善き状態を得る。適切な雨により食料が確保され，社会秩序が保たれる。

4-3. (I) Sākamedha 祭 (Mahāhavis 献供まで)：神話世界における Indra による Vṛtra 殺し，または神々による Asura 達の征服に対応して，現実世界において祭主が彼の敵対者を克服し，その結果として祭主が現実世界における繁栄を獲得する。

(II) 祖霊祭：祖霊達を満足させ，早死などの死とのかかわりを断ち，順調な生を全うすることができる。そして一年や季節などの時間の単位を満足させる。

(III) Tryambaka 祭：恐ろしい神 Rudra を宥めることによって，彼がもたらすであろう災を防ぎ，遠ざけ，その結果として祭主は災のない生活を送る。

4-4. Śunāsīrīya 祭：適切な自然の運行による食料の確保と繁栄の獲得。

各祭式の個々の行為に対する解釈の中には，それら祭式そのものを完成させる，または実現させる，そしてそれぞれの祭式に際して祭られる諸神格を満足させるなどの共通した項目もあるが (4–1 の要約 6, 4–2 の要約 9, 4–3 (I) の要約 3, 4, 4–3 (II) の要約 4, 5, 4–3 (III) の要約 3, 4–4 の要約 2, 3)，各祭式の解釈を通観してみると，各祭式毎に置かれる重点が明瞭に異なっているのがみてとれる。各祭式の解釈の中心になっている神格と彼に結びつけられたエピソードをみてみると次のようになる。4–1 の Vaiśvadeva 祭においては Prajāpati と彼による生類の創造，4–2 の Varuṇapraghāsa 祭においては Varuṇa と彼の宥和，4–3 (I) の Sākamedha 祭では Indra の Vṛtra 殺し，または神々による Asura 達の征服，4–3 (II) の祖霊祭では祖霊達の宥和，4–3 (III) の Tryambaka 祭では Rudra の宥和と中心的話題がすべて異なっている。更に Vaiśvadeva 祭の解釈の中心的存在である Prajāpati が Varuṇapraghāsa 祭や Sākamedha 祭や Tryambaka 祭においてそれぞれの祭式の解釈の中心となっている Varuṇa, Indra, Rudra などと並んで同等に扱われることもない。この事情は他の神格の他の祭式の解釈の際にも同様である。

2. Heesterman と Thite の解釈について

Cāturmāsya 祭を構成する各祭式が，構成要素として同格であるので，それら各祭式の解釈において登場する神格も，そして解釈の結果として各祭式に想定された機能

も同格に扱わねばならないであろう。

Heesterman は Rājasūya 祭の構成要素としての Cāturmāsya 祭の解釈に際して Varuṇapraghāsa 祭の中心的なテーマである Varuṇa の枷からの解放と，Sākamedha 祭における Indra による Vṛtra 殺しを Vaiśvadeva 祭の中心的テーマである誕生の観念と結びつけているが [HEESTERMAN 1957: 28]，その操作は Varuṇapraghāsa 祭，及び Sākamedha 祭の解釈の背景にある観念世界を余りに狭い要素へと還元してしまっていることになる。従ってこの還元的操作にもとづく彼の Cāturmāsya 祭全体の解釈：The cāturmāsyas can therefore be summed up as the ritual evocation of the universal process of maturing and birth in the vegetable, animal and human spheres through the year. は，Cāturmāsya 祭の解釈の観念の世界を余りに小さく凝縮しすぎているように思える。

Thite は Cāturmāsya 祭の解釈を要約して次のように主張する：The original nature of the Cāturmāsya-sacrifices must have been "a curing magic" performed by the "masses". [THITE 1975: 76] Cāturmāsya 祭全体の解釈の際に 1–3 で，KB, GB は Cāturmāsya 祭は治療祭式であるという。そしてこの線にそった解釈を 4–1–2–5, 4–3–34–1, 4–4–1 で与えている。KB, GB 以外に治療の観念を解釈に導入しているのは 4–3–34–1 の MS, KS, TB のみで，この場合解釈される mantra に「治療薬」という語が含まれている。従って「治療」という観念によって解釈を行なうのは Brāhmaṇa 文献の最新層に属する KB, GB とみなしてよいと思う。そうすると最新層に属する KB, GB の伝える治療という解釈が Cāturmāsya 祭の本来の意味という Thite の主張に疑問を感じる。更に祭式に参加する者は祭官以外には主として祭主と彼の妻である。Varuṇapraghāsa 祭の供物の一つである karambhapātra (4–2–5–4, 4–2–5–5) と，Tryambaka 祭の Rudra に対する一皿の puroḍāśa (4–3–49–2, 4–3–49, 3) の解釈の際に祭主の家族が考慮に入れられているが，それは祭式解釈の問題である。Tryambaka 祭で Rudra に対する献供が行なわれた四辻の祭火のまわりを祭主の家族も回るとされたが (4–3–54)，これも Thite のいう "masses" にあたらないと思う。従って Cāturmāsya 祭に対する Thite の解釈も受入れがたいものである。

3. 結　　語

Veda 祭式は，実際に行なわれる個々の祭式行為に関しても，その行為の意味づけの基礎となる観念世界に関してもきわめて複雑な様相を呈している。しかし，その

Veda 祭式を通じて実現しようと願った願望の実際は素朴で現実的なものであった。文化という，自然に対して働きかける武器を今日のように自由にできなかった古代人にとって，自然は限りない恵みを与える優しい存在であると同時に，飢えや病気，旱魃や大雨などの天災をもたらす恐ろしい面をともなって人間に対峙していたであろう。そのような自然の中に生を受け，生きていくことは今日の我々が想像する以上に難しいものであったであろう。厳しい自然の中で必死に生きていこうとする古代人の切実な願望が，Veda 祭式の解釈文献である Brāhmaṇa 文献により Veda 祭式に想定された効果に読み取ることができると思われる。

Cāturmāsya 祭の第一の祭式である Vaiśvadeva 祭によって，祭主に子孫と家畜が無事に誕生し，豊かな食料が確保され子孫や家畜がすこやかに育つということが一応保証される。しかしその生活は決して無事平穏なものではなく，人間の犯した罪に対して罰を加える司法神 Varuṇa の干渉，現実世界における敵対者 (bhrātṛvya) との戦いとその克服，ゆえなく人間や家畜に災をもたらす Rudra 神の影響と多くの障害が存在する。そこで Varuṇapraghāsa 祭により Varuṇa を宥め，Sākamedha 祭により敵対者を克服し，Tryambaka 祭により Rudra を宥め，それらの障害を除去することを期する。生きている人間にとり死は逃れられない宿命であるが，早死は大いなる不幸であり避けたいものである。祖霊祭により祖霊を祭り，祭主の一家に順調な死が訪れることを願う。このように，柔和でありかつ恐ろしい自然の中で生を受けた人間が可能な限り平安な生活を送ることができるるための保証を求めたのが Veda 祭式であったであろう。そしてこのことを MS, KS, TB は Prajāpati による Asura の駆逐と生類の創造 (1–1) と総括し，KB, GB は治療祭 (1–3) というように表現している。古代インドには，無限の流れとしての時間の観念はなく，時間は一日，一月，一季節，一年という単位の繰返しと考えられていた。ŚB, TB 1–4 のいう年の獲得，季節の獲得 (1-2) は，時間の流れに従って起こる自然の順調な運行を願うものであり，それは自然に依存する人間の生の平安を求める願望の別の表現と考えてよいであろう。

略　字　解

ĀpŚS: Āpastamba Śrautasūtra.

ĀśvŚS: Āśvalāyana Śrautasūtra.

BaudhŚS: Baudhāyana Śrautasūtra.

BhārŚS: Bhāradvāja Śrautasūtra.

GB: Gopatha Brāhmaṇa.

HirŚS: Hiraṇyakeśī Śrautasūtra.

JB: Jaiminīya Brāhmaṇa.

KātyŚS: Kātyāyana Śrautasūtra.

KB: Kauṣītaki Brāhmaṇa.

KS: Kāṭhaka Saṁhitā.

MānŚS: Mānava Śrautasūtra.

MS: Maitrāyaṇī Saṁhitā.

PB: Pañcaviṁśa Brāhmaṇa.

RV: Ṛg Veda Saṁhitā.

ŚāṅkhŚS: Śāṅkhāyana Śrautasūtra.

ŚBK: Śatapatha Brāhmaṇa Kāṇva recension.

ŚB(M): Śatapatha Brāhmaṇa (Mādhyaṃdina recension).

TA: Taittirīya Āraṇyaka.

TB: Taittirīya Brāhmaṇa.

TS: Taittirīya Saṁhitā.

VaikhŚS: Vaikhānasa Śrautasūtra.

VaitS: Vaitāna Sūtra.

VārŚS: Vārāha Śrautasūtra.

VS: Vājasaneyī Saṁhitā.

文　　献

BHIDE, V. V.

1979 *The Cāturmāsya Sacrifices.* Pune: University of Poona.

CALAND, W.

1918 Erklärende und kritische Bemerkungen zu den Brāhmaṇas und Sūtras. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 72–73: 1–31.

1932 Notes on the Kauṣitakibrāhmaṇa. *Acta Orientalia* 10: 305–325, Leiden.

EGGELING, J.

1972(1882) The Śatapatha-Brāhmaṇa. *Sacred Books of the East, Vol. 12,* Delhi: Motilal Banarsidass (London).

永ノ尾信悟

1984a「古代インド季節祭の研究」『民博通信』 26: 62–70。

1984b「古代インド祭式文献に記述された穀物料理」『国立民族学博物館研究報告』9(3): 521–532。

GONDA, J.
1957 The vedic concept of aṁhas. *Indo-Iranian Journal* I: 33–60.
1978 *Religionen Indiens I.* Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer.
1982 *The haviryajñāḥ somāḥ.* Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
HEESTERMAN, J. C.
1957 *The Ancient Indian Royal Consecration.* 'S-Gravenhage: Mouton & Co.
HILLEBRANDT, A.
1981(1897) *Rituallitteratur: Vedische Opfer und Zauber.* Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt (Straßburg).
HOFFMANN, K.
1975 *Aufsätze zur Indoiranistik.* Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
KANE, P. V.
1974 *History of Dharmaśāstra, Vol. II, Part II.* Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
KEITH, A. B.
1970(1925) *The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads.* Delhi: Motilal Banarsidass (Cambridge Mass.).
NARTEN, J.
1964 *Die sigmatische Aoriste im Veda.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
OLDENBERG, H.
1970(1923) *Die Religion des Veda.* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
RAU, W.
1957 *Staat und Gesellschaft im alten Indien.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
THITE, G. U.
1975 *Sacrifice in the Brāhmaṇa-Texts.* Poona: University of Poona.
VISHVA, Bandhu
1962 *A Vedic Word Concordance, Vol. I, Saṁhitās Section, Part V.* Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.
1973 *A Vedic Word Concordance, Vol. II. Brāhmanas Section, Part II.* Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.
WEBER, A.
1862 *Die vedischen Nachrichten von den naxatra (Mondstationen).* Berlin: F. Dümmler's Verlags-Buchhandlung.
1973(1870) Zur Kenntnis des vedischen Opferrituals. *Indische Studien* 10: 321–396.